

劇団キンダースペース上演台本

「新・復活2024」

作・原田一樹

登場人物（初演時は十八名の俳優で演じた）

△一幕▽

芸術座稽古場

抱月

川島（記者）

演出助手

付き人

女子監房

看守

女看守

身重（女囚）

赤毛（女囚）

予想屋（女囚）

コラブリョーワ（女囚）

カチューシャ（女囚）

ネフリュードフ邸

ネフリュードフ

アグラフェーナ

仲買人

運搬人

地裁

教師

商人

判事

裁判長

エフエミア

検事

弁護士

叔母屋敷

ソフィア（ネフリユードフの大叔母）

マリア（ネフリユードフの叔母）

チホン

面会所

弁護士ファナーリン

解放軍

ヴェーラ

△二幕▽

抱月自宅前

イチ子（抱月の妻）

春子（抱月の娘）

ネフリユードフ叔母の領地

管理人

管理人の妻

農夫たち

ペテルブルグ駅頭

ナターシャ

ニキイフォロヴィチ

ペテルブルグ元老院請願局

セレーニン

医療病院

守衛

停車場

護送警官①③

護送隊長

囚人たち

シモンソン

第一幕

一、抱月と記者（大正三年二月）

芸術座「復活」の牛込清風亭の貸し稽古場。

客席下手前入口から台本と資料を抱えた抱月。

舞台上に差し掛かったところで、記者川島。

川島（呼び止めて）抱月先生！

抱月（立ち止まり）君は？

川島 『ダイアモンド』の川島です（名刺）。安成さんの発案で今度芸術座の特集を組むことになりました、「復活」稽古から上演まで一貫取材です。

抱月 安成君に言われて、はご挨拶だな。第一『ダイアモンド』は経済紙だろう。

川島 何でもやるんです。それも安成さんの方針ですが。

抱月 沢田君たちの大量脱退についての談話は出した。あとは本人たちに聞いてくれ。

川島 聞きました。意外だったのは皆さんマスコミの記事ほどには松井須磨子を悪く言わないんだ。……ああ失礼、大女優を呼び捨てにして。

抱月 男は狡いからな。

川島 いや、やっぱり格の違いでしょう。先生の談話通り、あの連中と須磨子座長とでは肝の座り方が違う。

抱月 座長じゃない。主体に据えてやっているだけだ。

川島 失礼。そういうことでしたね。

抱月 ……君はどんな方針で取材するんだ？ そこのゴシップ誌の後追いだったら好きにやってくれ、どうせ嘘八百を並べるんだらう。

川島 とんでもない。僕はマスコミや世間の正体をこそ暴きたいんだ。
抱月 正体？

川島 (メモを見て)「須磨子の悪口なら、いくら書き立てても角は立たない」国民新聞の記者の言葉です。どう思います？

抱月 どうとは何だ、どうもこうもないだろう！

川島 その通り。その実、売り上げを当て込んで卑劣です。しかしですわね……

抱月 わかった。しかし取材は事務を通してくれ。安成君だってそう伝えた筈だ。(行こうと)

川島 もちろんです！(回り込んで)僕らはなにより芸術座の方針を支持するんです。文芸協会の「人形の家」も見ました。自由劇場のイプセンより余程真つ当だ。大体小山内薫は歌舞伎の役者と女形ばかりに頼った挙句、とんでもなく松井須磨子をこき下ろす。大矛盾です。女性役を女優がやるのは当たり前ですよ。

抱月 そうか、ありがとう。(さらに行こうと)

川島 (追わず)しかしその同じ矛盾をですわね、逍遙先生にも感ずるんです。

抱月 (立ち止まって)……逍遙先生が何だ？

川島 確かに、文芸協会の演劇研究所はわが国初の男女共学だった。猛反対の理事会を説得されたのを知っています。でも裏腹に内部規律ばかり厳しくて、女の研究生が結局何人も脱会させられている。須磨子女史もそうです。須磨子さんの場合、もし先生が教職をなげうって守らなければ……

抱月 (何か言おうとするの)……

川島 (遮って)すいません、聞きたいのはそのことじゃない。僕はなにもかもが知識人たちの過剰反応としか見えないんだ。須磨子さんはリトマス試験紙です。そして、芸術座「復活」のテーマもそこにある。これ、違いますか？
抱月 取材は、正式に申し込んでくれたまえ。

川島 ええ、もちろん。

抱月は去っていく。この途中より音楽。
女囚たち、位置へ。

二、女囚監房

看守。

看守 出廷だ！ リュビーモフ・エカテリーナ・マースロワ！

身重 (寝ていたのが起き上がる) 待たせやがって、何でここにいるのか忘れちまうよ。

赤毛 (笑って) あんたじゃないよ。耳までいかれたのか？

身重 監獄でも女は値段で決まるのか？ こっちはもう十か月も待ってるってのにさ。

予想屋 馬鹿言ったら。

クラブリョーワ どこだって女は値段で後先が決まるんだよ。(カチューシャに) あんた、呼ばれたよ。

看守 マースロワ！

マースロワ、起き上がり、コートを羽織る。

クラブ いいね、大事なものは陪審員の心象だよ。予審とは違うんだ。

予想屋 陪審員の相手すりゃ、無罪になるよ。(笑う)

看守 私語は禁止。九時までに出頭。早くしろ。

カチューシャ (予想屋に) たばこ無い？ 後で払うよ。

予想屋 (一本出して)一ルーブル。

カチュ
ふぎけるな。

身重 (カチューシャに)あんだ、判事さんにきいちゃくれないか？ あたしの裁判はいつになりそうか？

コラブ 自分で聞きな！(カチューシャに)いいね、何もしてませんと、それだけ繰り返していりゃい

いんだ。しおらしくだよ。

看守 おい、いい加減にしろ！

カチュ (コラブリョーワに)他に言うことなんか無いもの。

看守 (カチューシャの腕をとって)準備はいいな。

看守、カチューシャ、出ていく。

三、モスクワ、ネフリユードフ邸

ネフリユードフ外出しようと。家政婦のアグラフェーナ。

アグラフェーナ (呼び止めて)コルチャーギン公爵家からお手紙です。

ネフリユードフ 手紙？(受け取って、読み始める)

アグラ 使いの者がお返事を待っております。改めると伝えましょうか？

ネフ (手紙を読みつつ)……すぐ書く。

アグラ お待ちいただくよう言ってます。

ネフ いや、伝言でいい。(懐中時計見て)遅れますが伺います、と。

アグラ 承知いたしました。(行こうと)

ネフ ミッシィだ。(アグラフェーナ立ち止まる) 今日、あなたは法廷だから展覧会にはおいでに

なれないはずです、だと。

アグラ お約束を？

ネフ らしいね。覚えはない。

アグラ わざわざお知らせ下さるなんて、ご親切ですね。

ネフ とんでもない。夕食会には必ず来いということだ。それだって約束したわけじゃない。

アグラ 御伝言をしてまいります……

ネフ どう思う？(アグラフェーナは又止まる)僕は、公爵令嬢にふさわしい男かね？

アグラ ……なぜ、そんな風に？

ネフ (また手紙に目を)いや……

アグラ ご結婚は、お二人にとってもこれ以上ないように思われますが。

ネフ なるほど、ありがとうございます。僕は出かける。夜はご婚約者の家でご夕食だ。

アグラ 行ってらっしゃいませ。

アグラフェーナは出ていく。

四、モスクワ中央裁判所・外の廊下／地方裁判所

商人風の男と教師、談笑しつつ。

教師 では、すべて外国から？

商人 いや、これで生地だけ取れば我が国も捨てたものではありません。

ネフ (部屋から)すみません、地方裁判所は？(二人の元へ)

教師

何の法廷です？

ネフ

陪審員なのですが。今日、公判のある殺人事件の。

商人

娼婦の殺人事件ですか。でしたら同じ法廷です。

教師

我々も陪審員です。

商人

ピョートル・バクラシヨフ。第二階級商人、毛皮の輸入をしています。(握手)

教師

中学校教師です。ユーリ・クレシヨフ。(ク)

ネフ

ドミートリイ・ネフリユードフです。

教師

公爵！ お目に掛かれて光栄です。確か軍隊におられたのでは？

ネフ

ええ、一昨年迄。

教師

スチエパン・クレシヨフをご存知ですか？ 弟でして、部隊は確か……

ネフ

私は五年で退官しましたから……

教師

そうでした。どうぞこちらに(控室へ)たしか、その後はパリにいらして、美術の方で活躍とか……

ネフ

いえ、ただぶらぶらと……

商人

御謙遜を(笑う)。

ネフ

陪審員は何人ほど。

教師

十二名です。それが決まりで。

商人

つまり、あなたでも逃げ切れなかったということですか？

ネフ

とんでもない、これは市民の義務ですから。

商人

しかし我々はまだいい方ですよ。この裁判は退屈じゃない。騒がれていたからご存知でしょう。娼婦がホテルのボーイと結託して客に毒を盛って2000ルーブリ奪った。驚くべき事件

ですよ。

判事

開廷いたします！

それぞれの場所へ。

判事 起立！

裁判長が入廷。

裁判長 被告を入廷させなさい。

看守に誘導され二人の被告。

エフィーミヤ・ボチコーワ、カチューシヤ、被告席へ。

裁判長 エフィーミヤ・ボチコーワ、立って前へ。(エフェーミア、証言台へ)

判事 本名をのべよ。

エフィーミヤ エフィーミヤ・イワーノヴナ・ボチコーワ

判事 身分は？

エフィー 町人です。

判事 生まれは？

エフィー カローメンスカヤ。

判事 宗教は？

エフィー あたしらはみんな、ロシア正教ですよ。

判事 結婚は？

エフィー していません。

判事 職業。

エフイ ホテル「マヴリタニア」のサーヴィス係をしています。

判事 前科は？

エフイ とんでもない。私にしてもボーイのシモンにしても、何年も真面目に務めてきたことは、誰に聞いてもらったっていいんだ。

判事 被告は聞かれたことにだけ答えなさい。前科はないんだな？

エフイ ありません。

判事 起訴状の写しは持っているか？

エフイ 持っています。

判事 お前はシモン・カルチンキン、マースロワ、兩名と共謀。被害者の鞆より現金一「3」ルーブルを盗み取った上、マースロワにヒ素を渡し持参のコニャックに混ぜ、被害者に飲ませしめ死に至らしめた。この罪状を認めるか？

エフイ ですから何度も説明していますが、私らホテルの者の仕事はお客様の世話をすることで、どうしてそんなことを……

判事 罪状を認めるか？

エフイ いいえ。

裁判長 座ってよろしい。(エフェーミア、被告席へ)次、リュボーフィ・マースロワ。

カチューシャ、立って、証言台へ。

判事 名前は？

カチュー リュボーフィ・マースロワ

判事 父親の名前は？

カチュ

私は、私生児です。

ネフ

……カチュユーシャ？（周りが視線を向ける）

判事

……洗礼親の名はあるだろう。

カチュ

ミハイロフ。

ネフ

（隣の教師に）リュボーフィ？　リュボーフィと言ったんですか？

教師

（小声で）書類にあります……

判事

陪審員。質問は後ほどお願いいたします。宗教は正教だな。

カチュ

はい。

判事

職業は？

カチュ

店に、出ていました。

判事

何の店だ？

カチュ

……よく御存じの癖に。

商人

ははは……（笑って、押し殺す）

裁判長

判事……（書類を示す）

判事

（覗き込んで）……リュボーフィというのは、本名ではないのか？

カチュ

お店に出るときの名前です。

判事

本名をいいなさい。

カチュ

マースロフ。

判事

それは姓だろう、名は？

カチュ

エカチエリーナ。カチュユーシャと呼ばれていました。

ネフリユードフ、弾かれたように立ち上がる。

判事 (見とがめて)どうか、なさいましたか？

ネフ ……いえ。(顔を伏せ、座る)

判事 罪状を認めるか？

カチュ (ネフリユードフを見るが、無反応で)私は何もしていません。酔

っ

いて覚えて

判事 いないんです。

カチュ 何もしなかったことは覚えているのか？ (エフィーミヤ、笑う)

判事 殺すほどのことをしたのなら、覚えています。

カチュ (裁判長に)三名とも否認です。

…

被告三名に対する起訴状は以下の通り。一八八〇年一月一日、モスクワ市内のホテル・マヴリタニアにおいて、宿泊者たるクルガン州第二級商人、フェラポイント・エミリヤーノヴィチ・スメリコフの所持したる指輪、および現金一「三」ルーブリの窃盗を企て、被害者より預かりたる鍵を使い鞆より略取。さらに発覚を恐れ、被害者を死に至らしめる目的で…

カチューシャとネフリユードフを残し、他は暗く。

五、 四月、パノーヴァ。ネフリユードフの二人の叔母の屋敷。八年前。

大叔母「カチューシャ！」の声。

カチューシャ、顔を挙げる。

カチューシャは復活祭のベールをかけている。

大叔母 カチューシャ、ここだったの？ ミーチャの寢室の支度はすんだらうね？ 今夜戻るのよ。

カチュ
（ネフリユードフに目線を）……もう、おいでに。

大叔母
（ネフリユードフを認めて）マリア！ ミーチャが帰ったわ。ミーチャ！（ネフリユードフに抱き付きに行く）

マリア叔母
（現れて）ミーチャ！ ミーチャ！（も同じように）

ネフリユードフの部屋。

大叔母
（ネフリユードフを抱いて）キリストは、よみがえりたまえり。

ネフ
（出ていくカチュューシャを気にして上の空）……

大叔母
……お前、軍隊に入って神様の事を忘れたわけじゃないだろうね。

ネフ
大叔母さん、ご無沙汰していました。（抱擁して接吻する）

マリア
キリストはよみがえりたまえり。（同様に）

ネフ
キリストはよみがえりたまえり。

マリア
（嬉しそうに）髭まで生やして……

ネフ
規則なんです。近衛は、中尉になるとこれが決まりで。

マリア
さあミーチャ。（手を引いて部屋へ）お前の部屋は何もかも前のまま。三年前、ここでひと夏過ぎした時となにも変わってない。

大叔母
お前、本当に明日、発たなければならぬの。

ネフ
ええ。

大叔母
戦争なんて……

マリア
私たちは、大学に残るものだとばかり思っていたのに……

ネフ
気が変わったんです。

大叔母
だからってなにも軍隊になんか……

ネフ おかげで鍛えられました。そういうえば、カチューシャは？

マリア ええ、さっきまでお前の部屋を片付けて、教会へ行ったのかしら。

大叔母 ……ミーチャ、わかっているだろうけれどあれは孤児だからね。

マリア (笑って) そんなこと、この子は充分心得ていますよ。

ネフ ちよつと話がしたいんです。三年前、僕の論文にケチをつけたのは彼女だけですからね。(冗談で)

マリア あの娘は、よく本も読んでいるから。

ネフ 叔母さんたちの教育方針が良かったんですよ。

大叔母 ……ミーチャ、そのお前の書いたものことだけど。

ネフ 忘れました、なにもかも。手紙にもそう書いたじゃないですか。つまらない心配をかけてすみません。

大叔母 つまらない？ 土地を百姓たちに分けてしまうなんて……

ネフ 半分だけです。

大叔母 生きた心地がしなかった。お前の母親もどれだけ苦しんだか。

ネフ だけどおかしなものですよ。そのあと作った博打の借金は何も云わずに出してくれました。

大叔母 当たり前じゃないの、それはお前が望んでしたことじゃないだろう。

ネフ (笑って) そりゃそうだ。

マリア 分かってくれたのならいいじゃないの。若い内はみんなそう。いつか眼は覚めるものだわ。

ネフ それで叔母さんたちは教会へは？

大叔母 最近、夜、出歩くのは辛くてね……

マリア カチューシャに会いたいのなら行ってみればいい。今日は一晩中、教会だろう。

ネフ そうですか。明日また会えるでしょう。

マリア 今夜は早くお休み。チーフオンにお湯を持ってこさせるよ。

ネフ おやすみなさい。
大叔母 キリストは、よみがえりたまへり。
ネフ キリストはよみがえりたまへり。

叔母たちは出ていく。
ネフリュードフ、落ち着かず歩き回る。
上着から手紙を出して読む、決心して出ていこうと。
手袋をして上着を着たところで、外に誰かいることに気付く。

ネフ ……カチューシャ!?
チフォン いえ、若旦那様。私です。
ネフ ……チーフォンか。

手袋と上着を脱いで、ドアへ。

チフォン (入って)お湯をお持ちしました。お熱いのはお嫌いでしたよね。
ネフ そういえば子供の頃、お前のお湯で、飛び上がったことがあった。
チフォン (水差しをおき、復活祭の卵を出して)お一つお取りください。百姓たちが配っております
もので……
ネフ ありがとう。
チフォン 近衛中尉におなりだそうで、(感慨深く)御立派になりました。こうして、復活の日においでいただけるなんて(しきりに口を拭う)……
ネフ ……キリストはよみがえりたまへり。(接吻をする)

チフォン キリストはよみがえりたまへり。お目に掛かれて、これに勝る幸せはありません。

ネフ みんな、変わりないだろうね？

チフォン 神様のおかげで子供も孫も。年寄のポルカンが去年……。可哀そうなことをいたしました。

ネフ ポルカン？

チフォン 犬です。

ネフ そうか、それは気の毒だった。

チフォン ……では今夜は。若旦那様もお疲れでしょうから。

ネフ ああ、ありがとう。

チフォン 良い祝日を。(口を拭って、両手を広げる)

ネフ キリストはよみがえりたまえり。(接吻)

チホン キリストはよみがえりたまえり。

ネフ (送り出して)またいつでも顔を見せてくれ。

チホン いいえ、もうお邪魔は……

ネフ (気持ち急いで)そうか、残念だ。

上着と手袋を持ち、ランプを消して出ていく。

ややあってノック。(ネフリユードフは舞台前で立ち止る)

カチュ (外で)タオルをお持ちしました。(返事がないことを確認して)……失礼いたします。

カチュューシヤは復活祭の質素な白いワンピース。

タオルと石鹸を置き、出ていこうと。

テーブルの上に広げられた手紙を見て、取る。

ネフリユードフ戻る。

カチュ

(不意を突かれて)お出かけかと思ったもので。

ネフ

教会と聞いて会いに行こうとしたんだ。窓に君をみつけられなかったら行き違いだった。

カチュ

タオルを忘れていて。石鹼はこちらをお使いください。

ネフ

その為にわざわざ教会から？

カチ

これから出かけるつもりでした。……よい祝日を。(出ていこうと)

ネフ

三年ぶりじゃないか。少しいてくれたっていいだろう。

カチュ

こんな時刻ですから。

ネフ

カチューシャ。僕は明日発つんだ。それまでに二人になれる時間はない。君に聞きたいこと

カチュ

があるんだ。明かりをつけて下さい。

ネフリユードフはランプをつける。

ネフ

座ってくれ。

カチュ

……(椅子に。テーブルにはカチューシャが手に取った手紙)

ネフ

君からの返事だ。(手紙をとって、封筒へ戻しつつ)三年前の夏を、なにもかも忘れてしまっ

カチュ

たのかと思った。

カチュ

あの時はほんの子供でした。

ネフ

僕はそうだ。君の方がずっと大人だと思ったよ。

カチュ

……

ネフ

何か飲む？

カチユ いいえ、けっこうです。

ネフ 君と飲むつもりで持ち帰った。(グラスを出して)

カチユ とんでもない、こんな時間に。

ネフ こんな時間に部屋に来たのは、君の方だ。

カチユ ……どういう意味ですか？

ネフ 本当は、僕がいると思ったのだろうか？(酒を注ぐ)

カチユ タオルをお届けに上がっただけです。部屋においてでしたら、ドアごしにお渡しして帰りました。

ネフ 冗談だよ。

カチユ この三年で大人におなりになったのは、旦那様の方なのでしょね。

ネフ 名前で呼べよ。僕はここの旦那じゃない。

カチユ すみません……

ネフ 変わったと言いたいんだろう、そりや変わるさ。兵隊になったんだ。

カチユ 近衛士官に昇進されたと伺っています。

ネフ 軍隊は軍隊だ。命令されれば明日は戦地だ。

カチユ それで、私になにを？

ネフ (グラス出して)飲んで。

カチユ いえ本当に……

ネフ 聞きたいことはたくさんある。一晩では話しきれない。(カチユーシャが何か言いかけるのを制して)冗談だよ。一つは報告だ。君の忠告の通りだった。僕が土地を譲った百姓は、すぐ売り払って、町に居酒屋を作って遊び暮らした。その拳句、身を持ち崩して、道端で死んじまった。

カチユ そんな、私はただ……

ネフ 君は、ただこう言った。ピアノを弾けるのも本を読めるのも地主だからだ、と。

カチユ 私は、あなたのお考えを叔母様達にまで強い理由がわからないと申し上げたんです。

ネフ どうして？ 一人が何をしたらって世の変わらない。皆が正しいことをして、やっと社会は動くんだ。

カチユ 叔母様達は私の恩人です。私のような者にも親身になって下さいます。

ネフ それは、何もしなくても金が入ってくるからだ。地主が地主である理由なんてどこにもない。神の前では人間は平等じゃないのか。

カチユ ええ平等。だからいい人もいれば悪い人もいるんです。それを誰も彼も公平に扱うなんて人がするべきことではありません。

ネフ そう！ そう言ったんだ、君はあの時ボートに乗って。僕は興奮して立ち上がって水に落ちた。それを見て君は笑った。僕は余計腹が立って。けれど這い上がった時には君から唇を……君からだった、イラクサの中に倒れ込んだ時とは違って。

カチユ ……

ネフ あれから君を忘れたことはない。君は僕をどう思っているんだ？ それが聞きたい。その答えを聞くために帰って来たんだ。

カチユ わかりません……

ネフ わからないわけがないだろう。

外から讚美歌が聞こえてくる。

ネフ (立って、窓際へ)人が集まっている。

カチユ 雪の中で灯を灯すんです。復活祭の御祝いの為に。

ネフ 僕らはまだ、復活祭の挨拶をしていない。

カチユ ……キリストは、よみがえりたまえり。
ネフ カチユーシャ……(抱擁を待つ)

カチユーシャはネフリユードフに近づき、抱擁し接吻する。
ネフリユードフはカチユーシャを抱きしめる。
ややあつてカチユーシャは離れる。

ネフ どうして？

カチユ 教会に行かなければ。

ネフ 行ったことにすればいい。

カチユ ここにいたと知れたら、私はこの家にいられなくなります。

ネフ じゃあせめて答えを聞かせてくれ。君は僕をなんだと思っている？

カチユ 私は、この使用人です。

ネフ そんなことは聞いてない。叔母たちに釘を刺されたのだろうか、おかしいじゃないか、そんなことで態度を変えるなんて！

カチユ 今日の貴方は私の知っていた貴方ではありません。……ごめんなさい。戻ります。

ネフリユードフはカチユーシャを捕まえる。

首筋に接吻を繰り返す。

カチユ よして、ミーチャ！（逃れる、椅子を倒す）

ネフ 君の部屋に行く。いいだろう？

カチユ 部屋にはマトリョーナもいるのよ。

ネフ 今夜はいいない。僕は明日、隊に戻って、明後日は戦地だ。もう二度と会えないかもしれないんだ！

カチユ ……

ネフ 後悔はしたくない。君が欲しい。僕を信じてくれ。もし君に僕を愛してくれる気持ちがあれば、欠片でもあるなら……

ドアから、携帯電話の声。

携帯電話 若旦那、どうかしました？

ネフ なんでもない。水をこぼした。

携帯電話 ではまたお持ちします。

ネフ かまわないでくれ！ いや、そうだな、頼む。

カチユ ……

ネフリュードフはドアへ。

外の様子をうかがいカチューシャを送り出す。

ネフ すぐに行く、ベランダの鍵を開けておいて。

カチユ 出来ません……

ネフ しっ！ 後で。

部屋に戻る。椅子を直しグラスを片づけ、身なりを整える。

携帯電話が新たな水差しを持って来る。

チフォン 若旦那様……

ネフ (受け取って)ありがとうございます。一杯やっていたら足元がふらついた。

チフォン お怪我は？

ネフ なんでもない。

チフォン さようですか、おやすみなさい。

ネフ 待ってくれ、今開けてしまったがお前にやろう。(コニヤックの小瓶)

チフォン とんでもない……

ネフ 精進落とした。今夜飲まないと意味がない。飲んでぐっすり休んでくれ。

チフォン しかし、こんな高価なものは……

ネフ キリストはよみがえりたまへり。

チフォン もしソフィア様に知られたら……

ネフ 呑んで、ピンは隠しておけばいい。お休み……

チフォンを追い出し、部屋に。

カチューシャの部屋にカチューシャ、寝間着になっている。

部屋の隅で、膝を抱える。

ネフ この気持ちは、嘘じゃない。

財布を出し、紙幣をつかみ、出ていく。

カチューシャの部屋の外にフランス窓が浮かび上がる。

ネフ (影と声)……カチューシャ。

カチュ (身を固くする)……

ネフ (小声)カチューシャ。(ガチャガチャと窓を開けようとする音)カチューシャ、空けてくれ。

ネフ (意を決したように、声を上げる)カチューシャ!

カチューシャ、反射的に窓へ。鍵を開ける。

ネフリユードフが室内に。

カチューシャを捕まえ、寝間着を落とす。

その背中が月の光に浮かび上がる。

ネフリユードフ裸のカチューシャを抱きかかえ倒れ込む。

六、モスクワ地方裁判所・公判②

エフィーミヤが法廷に(一人で浮かび上がる)。
明りの中には、

エフィ その晩だけあの女は二三度来ました。男のお使いで、金をとりに。女の店で飲んでいた

んですよ。ベロベロでね。私はフロントの当直で、(本人を振り返って)ボーイのシモンソ
ンはたまたま仕事終わりで残っていたんです。で、あの女が客の鍵を持っていたもので部
屋まで案内して……。私らは部屋には入ってません、決まりですから。だからその客が大
金を持っていたなんて知りようがないんだ。……見ていた? そう言ったんですか、あの
女が? 良く言いますよ、あんなに酔っぱらってどうして。何もかもあの女がやったこ
とです。私らは日に五カペイカのチップを貰えば御の字なんだ、一晩で何ルーブリも飲ん

じまうような、そんな女とは違うんですよ。

検事、最終論告。

検事

……また、エカチエリーナ・マースロワはその幼少期、私生児でありながら貴族家庭の世話となり、読み書きおよび多岐にわたる教育を施されております。本人が望めばまともな職を得、健全なる社会に留まることも可能であったでしょう。が、この恩を捨て、みずから墮落を求め、酒場に流れついたのです。逆境に育ったものが皆、捨て鉢な生き方を望むわけではありません。すなわち、今回、陪審員によって下される被告の命運は、そのままこの社会の命運でもあるのです。どうかこれを肝に銘じて下すった上で、御裁定戴きたいと願う所存であります。

別の場所に、弁護士。

弁護士

えー、検事の弁論にもあった通り、かような職業が人心を惑わすものであることは論を待ちません。しかしまた、それらが必要とするものは常に男たちであるということも申し添えておきましょう。墮落は、果たして当人だけの責任でありましょうか……

評議員二人、移動しながら。

商人

あの女は無罪ですよ。

教師

でしようね……

商人

ボーイが毒殺をけしかけたんです。

教師
商人
しかしね、どうしてもあの手の店にいるというのがね。
それこそ偏見じゃないですか。

ここまでにネフリユードフ。

ネフ
あの……

教師
公爵、いかがですかご気分は？

ネフ
先ほどは、失礼しました。

商人
驚きましたよ、本当に顔色がお悪くおなりでした。

教師
あの煙ではね、法廷は禁煙にすべきだな。

ネフ
それで判決は？

商人
馬鹿なことになりましたよ。答申が一文、抜け落ちたというんですから。

ネフ
抜け落ちた？

教師
殺人の意志はなしという一文が。窃盗については入れながら……

ネフ
……なぜ？

教師
事務方の手落ちでしょう。しかしまあ審議も五時間ですか。

商人
確認はすべきでしたよ。

ネフ
それで、カチューシャは？

教師
カチューシャ？

カチューシャが、法廷に連行されてくる。

商人
(ネフリユードフに) 検事は一〇年のシベリア送りを求刑しました。間もなく判決です。

ネフ 馬鹿な、彼女はなにもしていませんよ！

商人 その点は、私も同意見です。

ネフ しかし、事務方のミスがあるなら訂正できるでしょう。

商人 それがね、遅すぎたようで。

教師 しかし、でしたら公爵も、無罪を主張なさっておかれれば……

商人 しっ。判決です。

裁判長と判事。

判事 起立！ 判決を申し渡します。

裁判長 「一八〇九年四月二〇日、皇帝陛下の命により地方裁判所刑事部は、陪審員各位の決議によ

り、刑法第七七一条第三項、及び、第七七六条に基づき次の通り判決する。エフィーミヤ・

ボチコワについては窃盗並びに殺人罪により、個人的並びに立場取得せる特権を剥奪

のうえ三年の禁固刑に処す。シモン・カルチンキンも同罪により十年の徒刑。エカチエリ

ーナ・マースロワは殺人罪により七年の徒刑。本件に関する訴訟費用は各被告が均等に負

担。支払い能力無き場合には国庫負担とする。」以上。

……(顔を挙げる)

何もかもお前の所為だ、このあばずれ！ シベリアじゃ馬も振り向かないだろうね、ざま

あないよ！

あたしは無罪です。なにもしていません……

退廷を命じます。閉廷。

裁判長、判決書を閉じて出ていく。

カチユ (追って)私は本当のことを言いました。殺すなんてどうして？

ネフ ……カチユーシャ。

カチユ なんて、こんなことになるの？

女看守、現れて、カチユーシャを捉え、連れ去る。

ネフ カチユーシャ！

カチユーシャ振り返るが、ネフリユードフと目を合わせても表情を変えずに、看守に引かれ、退廷。

教師 やむをえませんな。

商人 実は子供があったそうですよ、それで捨てられたと。

ネフ (商人を振り返る)……

商人 情状酌量を訴えるなら、弁護士もその辺りを押さないと。

教師 (帰り支度しつつ)子供なんて、調書にありましたかね？

商人 (コートを着る)いや新聞です。ゴシップ誌ですがね。

裁判所、外。

裁判長が帰り支度で出てくる。背後に判事。

判事 詐欺事件の調書を、用意させましたが。

裁判長 明日でいい。今日は急ぐんだ。

ネフ 裁判長！

裁判長 (立ち止まる。怪訝に)……

判事 分かりました。ではお気を付けて……(戻る)

ネフ 今の事件についてお話ししたいのですが。私は陪審員の一人です。

裁判長 ネフリュードフ公爵。以前にもたしか、宮廷晩餐会で。

ネフ そうですか。話というのは先ほど判決のマースロワについてなんですが……

裁判長 歩きながらでよろしいですか。(歩き出す)

ネフ 彼女は窃盗について無罪なんですから、殺人についても無罪のはずです。だって殺す理由

がないのですから……

裁判長 (立ち止まり、半ば笑って)……待ってください。我々はあなた方の答申に基づいて判決を下したのですよ。

ネフ ええ、しかし手違いがあつたんです！ 答申が不備でした。私としても不本意なまま……

裁判長 五時間の審議で、出された答申が？

ネフ 不十分でした！

裁判長 ……なるほど。でしたら上訴なさってください。では。

裁判長、去っていく

七、モスクワ、ネフリュードフ邸／女子監房

アグラフェーナお茶を入れつつ。

アグラ それで弁護士に？

ネフ その足で、モスクワで一番という弁護士を訪ねた。だが時間はかかる。その間もカチューシヤは檻の中だ。

アグラ ……あまり思い詰めない方が。

ネフ するべきことをしているだけだ。あんなものは裁判じゃない。暴力だ。

アグラ (お茶を出して)お食事は？

ネフ 夕食には間に合わなかった。だが何もいらぬ。

アグラ さきほどミッシィ様からご伝言がありました。

ネフ またか……

アグラ あなた様が、ご挨拶もなくお帰りになったことについては、風邪をひいたということにしたので、お話を合わせて下さるようにと。

ネフ 気分が悪くなったのは事実だ。あの連中には嫌悪感しかない。

アグラ それから……

ネフ まだあるのか？

アグラ 裁判で嫌な思いをされたようですけれど、お母様や他のお客様たちは何も存じ上げないし、まして悪意もないのだから、あまりお悪くお取りには、ならないように、と。

ネフ 「悪意はない」！ 馬鹿な！ ……なぜ、わざわざそんなことを言っよこすと思う？ あの人は、僕が所詮、同じ種類の人間なんだと分かせたいのさ。

アグラ あなた様は、あのお方たちとは違います。

ネフ ……いや、同じだ。

ネフリュードフは、椅子に。

ネフ

法廷で、被告がカチューシャと気づいてからどうしていたと思う？ 怖かった。いつ彼女が気づいて僕を指さすのじゃないか、すべてこいつの所為ですと叫ぶのじゃないか。尋問の間は下を向いていた。審議になってからは、無罪の主張は不審を抱かせるんじゃないか？ 関係を知っている者があるんじゃないか。で、黙っていた。嫌疑は偏見と憶測、物証もなく、動機も不確か、限りなく無実だということがわかっていながら、だ！

舞台別の場所。女囚達の監房。

カチューシャが看守に連れられてくる

あなた、何で戻ったの？ 判決が下りなかった？

……

(カチューシャに)マースロワ、差し入れた。

さしいれ？

店の女将だそうだ。(書類を出して)サインを。

……

うまくいかなかったの？

(鼻で笑って)禁固食らったのか。馬鹿だねー。

予想屋

だから言ったら。いい弁護士を頼まなければダメだって。

赤毛

言ったか？ そんなこと？

カチューシャは、無言で自分の場所に。

ネフリユードフ邸。(二つの場面は同時進行)

アグラ
あの娘は、相変わらずきれいでした？
ネフ
(顔を覆って)分からなかった……

二つの場面は、同時進行する。
コラブリョーワ、カチューシャに毛布を掛けてやる。

身重
大したことはないんだろう？ 何年さ？ 無期かい？

カチュ
……
コラブ
(身重に)黙ってなよ。(カチューシャに)あんたの食事は？ まさか、食べさせて貰えなかったの？

カチュ
…… (顔を覆い、嗚咽をこらえる)
予想屋
めしよりもタバコだろ。あるよ……

カチュ
(今受け取った、金をバラバラ出す)……
コラブ
およしよ。そんな。

予想屋
今朝言ったのは冗談だよ。(タバコを置き、紙幣を一枚とって戻る)

カチューシャ一本取る。手が震え、火がつけられない。
コラブリョーワが手で覆ってやる。

カチュ
(煙を吸い込んで、ようやく)七年だって……

身重
七年？ シベリアか？

赤毛
へー！

カチュ
おしまい、もう、何もかも。

カチューシャは、おせび泣く。

アグラ (リングを剥いていた) 少しでも。気分を和らげます。

ネフ 君は、覚えているのだろうか？

アグラ はい？

ネフ カチューシャが叔母の家に来た時はどんなふうだった？

アグラ …… 痩せていました。あまりしゃべらず。まっすぐに人を見る子供でした。

ネフ ……

カチユ (泣きじゃくりながら) あたしは、あの男が死んで何の得もないんだ。陪審員が無罪にしてく

れると信じてた。ところがあいつらは、タバコをふかして、ひとを上から下まで眺めて面白がっているだけなのよ。ちやほやした同じ口で、無実の女にシベリア送りを言い渡して、な

アグラ 私には、ごく普通の娘にしか見えませんでしたけれど。

ネフ ふっう？

赤毛 つまり一辺はちやほやされたってことさ。幸せだよ、あんたは。

ネフ だとしたら、カチューシャを囚人にしたのは法廷じゃない。僕だ。

アグラ あなたが、何を？

ネフ 復活祭の夜、叔母の屋敷に行ったのは、彼女を自分のものにするためだ。

アグラ そのお考えは、あなただけのものじゃありません。私は、お二人が互いに惹かれあっていた

のも存じ上げておりました。

ネフ あの三年前はそうだった。あの夏は。

アグラ 同じことです。

ネフ あの日は違う。軍隊で賭けをした。うまくやれるかどうか。

アグラ その後、身を持ち崩したのは、あの娘が自分で選んだ生き方です。

ネフ 叔母の手前、いたたまれなくなって出て行ったのさ。子供が出来て。僕は知らなかった。

アグラ だとしても、それはカチューシャが自分ではつきりさせるべきことでした。

ネフ 云えなかったのは、僕が口を封じたからだ。

アグ ……

ネフ 翌朝、僕が何をしたと思う？ 金を渡した。それが最後だった。

クラブ (カチューシャに) すこしは、おちついた？

カチュ ……

ネフ 僕は財産を整理しようと思う。君には田舎の家と農地を残す。もし彼女がシベリアに行くことになったら、僕も行く。

アグラ ……

ネフ 今、しなければならぬのは許しを請うことだ。そしてすべてを投げ出して罪を償いたい。

アグラ あの娘が、そう望んでいると、お考えになる必要がありますか？

ネフ ……

カチュ 店に出ている間、今に罰を受ける、そう思わない日はなかった。

赤毛 だったらその時に、悔い改めるべきだったね。

カチュ ……あんたにはわからないよ。

赤毛 どういう意味さ？

アグラ 公爵家とのご婚約はどうなさるのです？

カチュ 男を知らないあんたにはさ。だから亭主を殺しにかかったんじゃないか。怖くてさ。

赤毛 この商売女！（つかみかかっていく）

コラブ およしよ！（引き留める）

赤毛 うちの人は面会に来たんだ！ 明日も来る。あの人は自分も悪かったと言ってくれたんだよ！

ネフ 結婚などしない、ミツシイとは……

アグラ では、どなたと？

ネフ 償いを望んでいるのは彼女じゃない。あれを今のカチューシャにしたのは僕だ。今日、判決を受けたのはカチューシャじゃない、僕なんだ。

コラブ （赤毛に）今日はそっとしておいてやりな。気持ちはわかるだろう。

赤毛 よく言うよ。あんた恩を売ってこの女の店のやり手にでもしてもらおうってんだろう。見え透いてんだよ。

コラ この……

予想屋 しっ！

看守 おい、騒ぐな！

ネフ あした、カチューシャに会いに行く。

八、芸術座稽古場

カチューシャの松井須磨子、シートをはねのけて立つ。皆が驚く一瞬あって、出て行こうと。抱月が客席より。

抱月 どうしたんだ？ 僕は止めてないぞ。

須磨子 ……（一瞬立ち止まる。戻って、看守役俳優の手の台本を取り上げる）あんだ、大して台詞ないんだから。台本なんて持ち込まないで。

看守役 あ、いや……

抱月 彼はまだ日が浅い。仕方ないじゃないか。

須磨子 私は稽古前には相手役の台詞も全部入れてました。それが当然でしょう？ 休憩にしましょう。

抱月 ……まちなさい。

と、追おうとすると「ダイヤモンド」の記者、川島。

川島 先生。休憩ですか？

抱月 いや違う。もう一度今の場面の稽古を……

チーフフォン役の俳優。

チーフオン役　ここじゃお須磨が休憩と言ったら休憩だよ。(身重役の若手に)二幕の百姓たちの所をあ
わせたんだがね。

身重役　……はい。

抱月　よし、飯だ。

演出助手が現れて。

演出助手　食事休憩です。再開は〇〇分後。

俳優たちは転換して、散っていく。

川島　何がお気に召さなかったんですかね？

抱月　(まだ、須磨子の去った方を眺めやって)……いつものことだよ。休憩がおわればケロッとして戻ってくる。

川島　自由主義なんですね。

抱月　別に主義じゃない。うちがそういう風だというだけのことだ。

川島　つまり、先生が特別に許していらっしやる。

抱月　(苛立って)仕方ないじゃないか。

川島　(手帳を出して、何か書きこむ)……

抱月　君は門外漢だから分らんかもしれないが、俳優というものは思想感情を純一なまま保つことが必要なんだ。それを我儘と取るか情熱と取るかは……

川島　でも芸術座は幹事の合議制ですよ。とても近代的だ。齟齬はありませんか？

抱月 須磨子君だって幹事の一人じゃないか。
川島 結局それが、大量脱退の引き金になった。
抱月 おい、そのことは……
川島 記事にはしません。

演出助手が来る。

演出助手 先生。須磨子先生は帰られたそうです。
抱月 なんだって？

演出助手 どうでしょう？

抱月 わかった。今日は解散。明日は次の場からだ、伝えてくれ。

演出助手 わかりました（去る）。

抱月 （川島に）失敬するよ。

川島 これから、ご機嫌いかがですか？

抱月 ……誰が、誰のご機嫌を伺う？

川島 ……いえ。

抱月 そう言えば君は私の自宅の方も訪ねたそうじゃないか。いったいどう言うつもりでそんなことを……

川島 あ、中山晋平さんですか。どうもあの書生は口が軽いな。

抱月 そんなことはどうでもいい、私が聞いたのは……

川島 奥様は決して離婚には応じないと仰ってました。

抱月 ……り（息がつまる）

川島 僕は何も言ってません。先生が須磨子さんと同居していらっしやるのは既にご存じでした。

抱月 ど……

川島 しかし、僕は、どうも腑に落ちないんだ。

抱月 自宅には二度と行かないと約束しろ！ でないと今度こそ……

川島 分かりました。それで先生に伺いたいののは、先生は、本心から、松井須磨子に恋をされてい

るのか、ということなんですか？

抱月 ……

川島 質問の意味は、お分かりになります？

抱月は、無言で去っていく。

川島 そりゃそうか……（去る）

九、モスクワ刑務所、面会所。

質素な机が一つ。囚人たちの声、騒がしく。

ネフリュードフが来て、声の元を眺めやって呆然と。

女看守 （椅子を持ち）こちらでお待ちください。

ネフ ……ああ、どうも。

女看守 （机に。書類に記入する）

ネフ この面会はいつもああなのか？

女看守 ああ、とは？

ネフ 金網越しで怒鳴りあって、何を話しているのかまるで聞き取れない。

女看守
どこかに違う施設が？
……いや、失礼。

女看守
もちろん公爵は特別です。所長の指示で。
ネフ
そうか。ありがとう。

外にカチューシャ、ネフリユードフを見て立ち止まる。

女看守
（呼びかけて）マースロワ……
カチュー
クララかと思って。ごめんなさい、お待たせして。
女看守
入りなさい。

カチューシャ、部屋へ。
立ち上がったネフリユードフと目を合わせる。

カチュー
ええと……
ネフ
カチューシャ。長いこと悪かった。しかしどうにも身動きが取れなくて……、その……
カチュー
……（無言で見つめる）
ネフ
ネフリユードフだ。ドミトリー・イワノヴィチ……
……
何を言えがいいのか。君が僕を許せないのは分かる。いや、そのつもりだ。今更とは思うが、
僕としては出来るだけのことを……
カチュー
どこで、私のことを？

ネフ ……昨日、裁判で。陪審員の一人だった。
カチュ 陪審員？

ネフ ……君は、気づいていたと思った。

カチュ ……

ネフ (ショックを受け) いや、そうか。しかしあれは偶然じゃない、僕にとっては……(カチューシヤは怪訝にネフリユードフを見つめるばかり) カチューシヤ！ パノーヴァの叔母の家の日々を忘れたわけじゃないだろう？

カチュ (突然全てが蘇る。口を押え、胸を掻き合わせて身体を逸らす)

女看守が怪訝に。

ネフ ……それで僕は。……カチューシヤ！ 聞いてくれ！

カチュ 声を出さないで。聞かれているのがわからないの？

ネフ (小さく) 僕は、償いたい。

カチュ 償う、なにを？ 私は囚人なのよ！

ネフ 知らなかったんだ、なにもかも。

カチュ 知る必要なんかないもの。

ネフ 子供がいたと聞いたけれど……

カチュ 死んでくれました。養護院で、十日も待たずに。

ネフ そんな言い方はよしてくれ。

カチュ 産婆が言ったのよ！ 感染症で私も危なかったから代わりに逝ってくれたって。

ネフ 叔母たちは、君をみすてたのか？

カチュ もう止して。

ネフ 僕は信じている。君は殺人なんか……

カチユ 当たり前だわ！ でもどうやって判決をひっくり返すの？ まともな弁護士も雇えないの
に！

ネフ 弁護士は頼んだ。モスクワで一番の弁護士だ。上告も進めている。

カチユ ……

ネフ そのためにも色々手続きが必要なんだ。もう少し時間はかかる。

カチユ …… だったら一つ、お願いがあるんだけど。

ネフ なに？

カチユ お金を少し、ここだとしてもならなくて……

ネフ そうか、気づかなくて…… (財布から紙幣を出そうと)

カチユ (鋭く) よして！ (看守を気にして) 没収されるじゃないの。

カチユーシャはネフリュードフに体を寄せる。

ネフリュードフの手を包み、そこから金を抜き取る。

ネフ ……

ベルが鳴る。

女看守 時間です。

カチユ 来てくださってありがとうございます。さようなら。

ネフ カチユーシャ、まだ話したいことがあるんだ

カチユ (媚を売って) あら、まだ？

ネフ ……また、来る。

カチューシャは女看守に連れられて去っていく。
ネフリュードフ、一人残る。

ネフ ……

弁護士のファナーリン。

ファナーリン ……いかがでしたか、面会は？

ネフ ……

ファナ お忘れですか？ ファナーリンです、弁護士の。

ネフ いや。失礼。

ファナ 副知事に会いました。所長へ口添えをしてくれます。今後は面会もはるかに楽になる。
ネフ どうも。

ファナ (書類示して)元老院宛の再審請願の書類です。少し打ち合わせをしなくてはならない。なに
簡単な話ですが、場所を変えましょうか。(鼻の下を覆って)どうもね、ここは……

ネフ 馬車が外に。

ファナ そうですか、では……

二人、出ていく。

十、女囚監房。

カチューシャ、戻ってくる。
自分のベッドへ。

コラブ 面会は誰？

カチュ 昔のお客。

コラブ お客が何しに来たの？

カチュ からかいに来たんだろう。

予想屋 それにしちや長かったね。しかも金網の外でさ。

カチュ 余計なお世話だよ。

赤毛 ……男だろ、最初の。貴族様。

カチュ (振り返って赤毛を見るが、また毛布をかぶる)……

赤毛 うちの人が驚いてたよ。所長も副所長も最敬礼だってね。

身重 じゃ噂はガセでもないんだ。

カチュ うわさ？

コラブ あんたの事は新聞にも出たしね。

身重 一人回しちやくないか、伯爵だろうがハクションだろうが、貴族ならかまわないよ。

カチュ いいよ。だけどその前に男を扱う手管を憶えないとね。

身重 らくだ？

カチュ (予想屋に)酒、あんだろ？

予想屋 酒？

カチュ (金出して)これで買えるだけ。ケチケチすんじゃないよ。

身重 (コラブリョーワに)らくだの扱いと似てるってことか？

コラブ (身重に) そうだよ。(カチューシャに) あんたいいのかい？

カチュ (赤毛のベッドに) なにが？ この子のいい人が会いに来たんだ。お祝いしなくちゃ、今日は奢るよ。(予想屋に) さあ出した出した！

予想屋 (あたりを気にして酒瓶を) これっ切りないよ。

カチュ (コップを出して注ぎながら) 洗濯物の下に二本あるだろ。(コラブリョーワに) ベルタ、そっちも出して。

コラブ あいよ。

予想屋 ちよっと！

身重 (カチューシャに) あんた、こぼしてるよ！

カチュ (予想屋に) また仕込んできな。(身重に) ほら、みんなに配ってよ。

身重 なんなんだよ。

カチュ (赤毛に) ねえあんた、そんなに好きな人をどうして殺そうとなんかしたの？

赤毛 大きなお世話だよ。

カチュ 惚れてるんだろ？ 馬鹿にしてるんじゃない。分からないんだよ、私には。

赤毛 ……

カチュ 飲んで！ ほら、話してちょうだい。

赤毛 知らなかったんだよ、そんな人だって。怖くて。毎晩、泣いてばかりいたから。

予想屋 泣きたいのはこっちだよ。

カチュ だまって…

赤毛 ただ自由になりたくて。そいで(酒をあおる)

コラブ 魔がさしたんだよ。

身重 ばか、包丁だよ。

赤毛 (啜り上げながら) それなのにあの人、私がシベリアに送られたら、きっと付いて来るって

コラブ ……、向こうで仕事を探して自由になるまで待ってるって。(泣く)信じられなかったのよ、だって私、あの人の目を見たことなかったんだもの。ただ嫌で嫌で。もし、あたし…
声大きいよ。もう酔ったのかい。
カチュ ……いいじゃないか、飲んだら酔わなくちゃ。
赤毛 (泣きながら、飲む)…
予想屋 泣くか飲むかどっちかにしなよ。
カチュ よかったねあんた、そんなにいい人でき。

カチューシャは赤毛の頭を抱いてやる。

十一、ネフリユードフ邸

ファナーリンとネフリユードフ。

ファナ あとは元老院法務局がぼんくらではないことを祈るばかりです。

ネフ こういうのは、よくあることなんですかね？

ファナ (笑って)こつちが聞きたい。請願書には本人の署名が必要です。可能ですか？

ネフ 多分。

ファナ ではこれを。(書類をネフリユードフに)

ネフ 再審の可能性は？

ファナ 率直に申し上げて、あまり。元老院は事件そのものには立ち入らないというのが原則で、それを盾に仕事をしない。もし貴方の方に手蔓がありましたら動いてみてはいかがでしょう。ペテルブルグにお知り合いは？

ネフ まあ……

ファナ 最後に皇帝直訴と言う手段も。しかしこれも裏工作がモノを言う。

ネフ それで費用は？

ファナ 改めて秘書の方から。こちらにあなたの署名を。(カバンから新たな書類を)

アグラフェーナ。

アグラ 家具の引き取りの者たちが参りましたが。

ネフ かかってくれ。

アグラ (扉の外へ)入って。

ドアを開けて、仲買人と運搬人たち。

アグラ (運搬人に)高価なものばかりなの。気をつけて。

仲買人 傷はつけるなよ。

部屋のデスク、テーブルなどを運び出していく。

ファナ ここは引き払うのですか？

ネフ とりあえず、家具の処分を。

ファナ 控訴費用のために？

ネフ いや、私自身、少し生活を変えたいと思ひまして……

ファナ ……あなたはどちらに？

ネフ 拘置所の近くに。(サインした書類を返して)
ファナ ……なるほど。では私は。

ファナーリンは去る。
アグラフェーナは家具にカバーを。

ネフ ……カチューシャは、昔のカチューシャではなかった。
アグラ ……

ネフ 金をくれと言われて渡した。君の言った通りだった。

アグラ ……それで？

ネフ それで？ なにもかも僕がしたことだ。改めて罪の深さを感じたよ。

アグラ ……神様。

ネフ そう、神様のおかげだ。

運搬人がさらに運び出す。ネフリュードフ一人。
この間、監房は暗く。

十二、モスクワ刑務所・女囚監房／特別室

女看守が来る。

女看守 礼拝の時間です。
コラブ リューバ、礼拝だとさ。

カチユ ほっといて……

身重 起きやしないよ、ついさっきまで飲んでたんだから。

女看守 (匂いに気づいて) あんたたち、どこから酒なんか？

予想屋 バカ言うな、酒が手に入るわけないだろう。

身重 外で飲んできたんだよ。

女看守 後で全室検査。さあ、起きなさい！

赤毛 目が開かない。

クラブ あんた眼なんかないよ。手だしな、引いてやる。

女看守 マースロワ！

カチユ 今いくよ。

囚人たちは出ていく。

女看守 マースロワはこっち。

カチユ なに？

女看守 面会です。

カチユ だれ？

女看守 決まっているでしょう。来なさい。

特別室。

ネフリユードフが待っている。

カチユ

……

女看守

(椅子を示し)……そこに。(カチューシャ座る)(ネフリユードフから書類を受け取って)公

爵が、上告の請願書をお持ち下さいました。署名が必要です。名前は書けますか？

カチュ

ユ

女看守

書いて。(ペンを用意する)

カチュ

ユ

ネフ

その下にも。

カチュ

……(一瞬ネフリユードフを見上げ、また書類に)これで無罪？

ネフ

そう簡単にはいかない。まず法務局が書類を審査する。差し戻しの必要が認められれば再審

判断の会議にかけられる。その上で元老院が……

カチュ

ユ

ネフ

(確認して)ああ。しかし可能性はある。埒が明かなければ皇帝への直訴も考えている。

カチュ

ユ

ネフ

必要ならば。

カチュ

そんな大ごとになる前にどうかしてればね。店が頼んでくれたのは、れっきとしたでくの

坊。

ネフ

カチューシャ、僕は出来るだけのことはする、それで……

カチュ

ユ

ネフ

いや(女看守を見て)それで、少し考えたことがあって、(看守に)すまないけれど……

女看守は、無言で出ていく。

カチュ

ユ

ネフ

私、疲れてるの、眠れなくて。
カチューシャ聞いてくれ。前にも言ったが、僕は罪を感じている。

カチユ ……もう勘弁して。(机に突っ伏す)

ネフ そういうわけにはいかないんだ。僕は君に昔の姿に戻ってほしい、パノーヴァで出会ったころの君に。

カチユ ……

ネフ 僕は文学や美術を語り合った。ツルゲーネフやミレーについて。僕が「獵人日記」の感想を言ったら、きみは「片田舎」の方が……

カチユ (起き上がって)ここをどこだと思ってるの？

ネフ カチユーシャ。

カチユ 人を更生させるにしても、もう少し気の利いたやり方にしたら？

ネフ そうじゃない。君に思い出してほしいんだ。

カチユ おもいだす？

ネフ 君は何も覚えていないと言った。でも、それじゃ償うことも、罪滅ぼしもできない。僕はどれほど君に責められようがかまわない。むしろ望んでいる。僕にはそれが必要なんだ。

カチユ ……ほら、そう。

ネフ なにが？

カチユ 何も変わってない。あの時のまんま。

ネフ ……

カチユ あなたは将校の仲間内で幅を利かすため、女の一人や二人知ってなくちゃならなかった、素人女をね。それで私をモノにすると決めて、遙々パノーヴァまでやって来た。それが、あなたにとって必要なことだったから！

ネフ ……(苦しく)そうじゃない。

カチユ そうじゃない？なにが？

ネフ 確かに僕は君を欲しかった。けれどそれだけのために……

カチユ それだけのために来たのでしょう？ 復活祭の晩は使用人は留守だから。で、どうだった？

軍隊仲間の前で、抱き心地を披露した？ それで今度は、罪を感じたから償いたい？

君を愛していたからだ。

ネフ あい？

カチユ 君だって僕の気持ちはわかっていていた筈だ。

カチユ だったら、あのお金はなに！？

ネフ ……

カチユ あれは、誰に聞いた相場？ 商売女の十倍払えば後腐れはないって、誰が教えてくれたの？

神の前では人は皆平等、へえそう？ あの日まで私自分が一〇〇ルーブリだって知らなかつ

た！ 教えて、それは平等な値段？

ネフ ……

女看守。

女看守 マースロワ。何を騒いでいるの？

ネフ なんでもありません。……もう少し、よろしいですか？

女看守 (カチューシャに)この方が公爵だから、あなたはこんな待遇なのよ。よく考えなさい。

女看守、出ていく。

ネフ 君の言うとおりだ。だからこそ償いたい。

カチユ だれのために？ もうよして。(出て行こうと)

ネフ カチューシャ、結婚してほしい。

カチユーシヤは、ゆっくりと振り返る。

ネフ 今日はそのために来た。僕の決心は変わらない。

カチユ からかっているの？ 酔っているから？

ネフ ……僕は神の前で、そうしたいと願っているんだ。

カチユ 神ってなに？ どうしてそんなもののために人を苦しめるの？

ネフ どうして苦しむ？ 僕は君のそういう言い方の方がわからない。

カチユ 忘れたからよ、なにもかも。忘れなければ生きていられなかった。死んじまう代わりに忘れることを選んだの。当たり前でしょう？

ネフ ……死のうとしたのか？

カチユ ……

ネフ いつ？

カチユ 知ったことか。

ネフ パノーヴァの駅。あの夜。

カチユ 気が付いていたの？

ネフ 姿を見たわけじゃない。

カチユ ……あの翌年、あなたの部隊が移動中にパノーヴァで休暇があるとわかって、叔母様たちはあなたに手紙を出した。私のお腹の子が本当にあなたの子か確かめたるため。そしてもし、あなたの子だったら、どうするつもりかなのか聞こうとして。

ネフ ……

カチユ あなたは、そんな時間はとれないと返事をよこした。叔母様たちはそれで察した。私はまだ信じていた。一目、会えさえすれば。そう思って夜中にお屋敷を抜け出して、駅に着いた時

はあなたたちはもう列車の中。窓を探して同僚とカードしているあなたを見つけた時に、汽車が動き出して。走って、窓をたたいて……。一人が窓を開けてくれた。あなたを振り向いて。でもあなたは顔も出さなかった……。それでわかったの。あなたがあの時限りで、何もかも終わりにするつもりだったってことが。

ネフ 知らなかったんだ、子供のことは、誓って……

カチユ でも私がああホームにいたことは、気づいていた。

ネフ それは……、いや、しかし……

カチユ 私は、次の汽車に飛び込もうと決めて……。でもマトリョーナが追いかけてきて、二人で夜中のホームで抱き合って、あの娘の方が泣いていた。

ネフ しかしそのあと、叔母たちからは、何も。

カチユ 当たり前前、心優しい叔母様方だもの。三日したら次の奉公先を教えてくれた。子供を産んでも噂にならない隣の郡の警察長官の家……

ネフ ……

カチユ 分かるでしょう？ こんなこといちいち思い出して何になるの？

ネフ だからこそ僕は、君と……

カチユ あなたはあれから、一度でも私のこと考えたことある？ こんな偶然がなければ、あなたは思い出しもしない。私もそう。それが、今のあなたと私。

ネフ ……

カチユ 施しはありがとう。でも少しは、私どもの身になって下さいまし。

カチユーシャ、入り口に。

カチユ

(看守に)気分が悪いの。公爵にご迷惑をかけたくないわ。

ネフ ……だが、僕と君は、出会ってしまったんだ。

看守。

女看守 どうかしました？

カチュ 公爵はお帰りだそうです。

女看守 馬車をよびにやりますか？

ネフ いや……

女看守 (カチューシャに)戻りなさい。

カチューシャ、出ていく。

ネフ 僕はこれから領地を回って財産を整理する。それからペテルブルグへ出る。伝手をたどって

君の……、僕らの事件のためにいろいろやってみる。判決が破棄されるまで。

カチュ ……

ネフ 他に道はないんだ。僕が、君と……

カチュ お元気で。

カチューシャは去る。

ネフリユードフは椅子に座りこむ。

礼拝堂から聞こえてくる讚美歌。

カチューシャ、立ち止まる。

女看守 マースロワ。
カチユ まだ終わってない？
女看守 なにが？
カチユ 礼拝。
女看守 行きますか？
カチユ 間に合うなら……
女看守 来なさい。

二人、退場。

讚美歌は、カチューシャの唄に。

十三、芸術座の稽古場。(大正三年三月末)

川島。「復活」の新聞劇評を持っている。

川島 「カチューシャ可愛や別れの辛さ。街を歩いて居ると此唄が響く。凄じい流行。本年三月芸術座が帝劇に「復活」を演じた時、劇中松井須磨子扮するカチューシャが唄って以来、まず学生や女学生、昨今は新橋芸者にも恐ろしい勢ひを以て流行して居る。」(別の新聞)「日本の新しい芝居よ、お前が馬鹿にされ始めたのは、あのカチューシャの歌からだ……」「抱月氏足下、あなたの「復活」は少しもトルストイに忠実なものではありません、その精神、芸術。これほど乖離した『復活』がありえたでしょうか？」なに、気にすることはありません。「復活」はかつてない記録を作るでしょう。それより先生の「二元の路」という論文について……、(目を上げて)あれ。すぐ逃げるなあ。

十四、モスクワ刑務所・外

ネフリユードフが立ち上がり、出ていこうと。

客席通路にヴェーラ・エフレーモヴナ。

ネフ ……（立ち止まる）

ヴェーラ ドミトリー・イワノヴィチ・ネフリユードフ公爵。

ネフ ……あなたは？

ヴェーラ （舞台へ）こちらをご覧にならないで。私たちは、マースロワを別の施設へ移す手立てを持っています。

ネフ ……

ヴェーラ そのかわり、我々の仲間の移送にも力をお貸してください。

ネフ 仲間？

ヴェーラ 「人民の意志」の同士です。私たちは、あなたの書かれた地主制度についての論文も読みました。話を聞いていただけるなら少し時間をおいて、いらしてください。

ヴェーラは、先に立って歩いていく。

ネフリユードフも、ヴェーラのあとにつづいて。

川島 （見送って）次の休憩は十分です。（去る）

第二幕

十五 抱月とイチ子・神田諏訪町抱月自宅前(大正元年九月)(回想)

客席通路に風呂敷包みを抱えた抱月、背後に声をかける。

抱月 向こうに中山君のことは伝えてある。書籍は玄関横に置いてくれればいい。あまりバタバタしたくないんだ、昼までには済ませたい。

と、イチ子に気付く。

イチ子 お出かけですか？

抱月 ……ああいや、稽古に入用なものを少し、戻れていなかったのですね。

イチ子 言って下されば、お手伝いしましたのに。

抱月 いや、本ばかりだから。

イチ子 下着などもお出しいたします。少しお待ちください。(家の方向に)

抱月 いや、それはもういいんだ。

イチ子 (立ち止まる)……

抱月 すまない。突然だが、家を出ようと考えている。

イチ子 ……

抱月 このままでは私も仕事に集中できない。お互い不幸になるばかりだ。

イチ子 おたがい？

抱月 ……いや、悪いのは私だ。それはよくわかっている。

イチ子 あなたは、私たちに死ねと仰るんですか？

抱月 ……何を、馬鹿な。

イチ子 今のあなたがあるのは島村の本家のおかげです。それも顧みず……

抱月 本家には充分尽くしたじゃないか。そろそろしたいことをしてもいいはずだ。

イチ子 そのためなら、私たちは路頭に迷っても構わないと。

抱月 どうしてそんなことになる！？ 自宅は君の名義だし、原稿料も印税もみんな君の口座に入る。子供たちが一人前になるまでは……

イチ子 帝大の山野辺さんから、春子との縁談に正式な断りがありました。女役者に入れあげているような家庭では困るということです。

抱月 ……本当にそんなことを言って来たのか？

イチ子 言わなくても分かります。あなたのために私たちは十分ひどい目に合っています。それでは足りないのですか？

抱月 わかった。もし春子が望むなら何とかする。話してみよう。とにかく今は……

イチ子 私たちは大学に辞表を出されたことも知りませんでした。

抱月 それは違う。仕方なかったんだ。突然、文芸協会を辞めることになって……

イチ子 逍遙先生が、そうしろと仰ったのですか？

抱月 いや、そんなことはない。しかし……

イチ子 あなた、どうして本当のことをおっしゃらないんです？ 松井須磨子という女と一緒に暮らしたいから、私たちを捨てたいと。

抱月 ……

と、春子。

春子 お母さん、もういい。お父さんだって男なんだからお妾の一人くらい居たってかまわなくて

しょう？

抱月 春子！ お前までなんてことを……

イチ子 (春子に) お前は、うちにいなさい。

抱月 松井君は断じて妾なんかじゃない！

イチ子 ……では、なんですか？

抱月 いや……

イチ子 あなた、今日、私がどなたにご相談に伺ったご存じですか？

抱月 (憔悴して) ええ？

イチ子 逍遥先生です。あなたのあの女への恋文を持って。

抱月 (驚いて) なんてことを……

松井君が聞いてあきれます。あのお手紙のように「まあちゃん」と、お呼びになったらいかがですか？

抱月 お前、子供の前で……

イチ子 それはこちらの台詞です。

抱月 あれは小説の下書きだ！ つまらない誤解をするな！

イチ子 書生の中山晋平と同じことを言うんですね。いつ口裏をお合わせになったかは知りませんけれど。

抱月 ……

イチ子 妾ではない。ではなんですか？ お答え下さい。

抱月 春子、家にいてくれないか。縁談のことはまた考える。

春子 お父さん、私、縁談なんかどうでもよかったのよ。

抱月 分かった。

春子 じゃあ……

春子は戻る。

イチ子 (見送って)子供にまで気を使わせて。

抱月 別れてくれ。

イチ子 ……

抱月 何でも君の言う通りにする。言ってくれ。

イチ子 そういう約束を交わしたのですね？ 何度も夫を変えている、子供の産めない、大勢の前で接吻して見せるあの女と。

抱月 ……私は、どうしたらいい？

イチ子 その前に答えてください、あの女は教え子ですか、人形ですか、それとも一時の……
抱月 あれは、ぼくの理想だ。

ファナーリン、女子監房の椅子へ。

続いて、カチューシャと女看守。

イチ子 また、訳の分からないことを……

抱月 ……

イチ子 わかりました。あの女が何でも私はあなたの妻です、決して別れません。逍遥先生にもそうお伝えしました。あなたが目を覚ましてあの女と切れるのをお待ち申し上げます。

イチ子は去る。演出助手。

演出助手 ……先生。

抱月 (我に返り)ええ?

演出助手 始めてよろしいですか?

抱月 ああそうだな。少し待ってくれ。(出ていく)

演出助手 ……(以下の芝居の間に退場)

十六 女囚監房

ファナーリンは書類をカチューシャに。

ファナ ……それから、自由がある。

カチュ 自由?

ファナ 病人相手だからいつ呼ばれるか知れない。規律も厳しい。様々な配慮も。しかし自分の意思で働く、そういう自由です。

カチュ 病人の世話が私なんかには?

ファナ もちろん、そのために学ぶことは山ほどあります。

カチュ コラブリョーワは? あの人は息子を庇っているだけなのよ。フェドーシャだって夫は告訴を取り下げたのに釈放されない…

女看守 二人は懲役刑務所に移りました。

ファナ (看守に)どうも。

カチュ 他にも罪もない女たちがいる。そっちから助けられれば?

ファナ 助けてますよ。不当に逮捕された貧乏人。政治犯、分離教会の信者たち。今や公爵は救民活動家です。陳情が絶えない。

カチユ ……そう。

ファナ 確かに病院勤めは特別待遇です。それが気に入らないのならそう伝えます。(カチューシャの手から書類を取る)

カチユ ……

ファナ そうだ、あなたが行くのは小児病棟です。できれば早めに回答を。(看守に)所長への面会は？

伺ってます。どうぞ……

ファナ (カチューシャに)では……。

カチユ わかりました。勤めます。

ファナ ……(立ち止まって)

カチユ それから、感謝しておりますとお伝えください。(頭を下げる)

ファナ 公爵とは来週ペテルブルグで落ち合います。その時に。

ファナーリンは出ていく。

女看守 分かっているでしょうが、病院には酒もタバコも持ち込めません。

カチューシャに続いて女看守も出ていく。

十七 パノーヴァ、ネフリユードフの今は亡き叔母の領地。

一幕とは変わって、荒れている感じ。家具には白い布。ネフリユードフ部屋へ。手には書類鞆。管理人が来る。

管理人 家具や調度は、ご葬儀から何も触っておりません。

ネフ ありがとうございます……

管理人 申し訳ございません。おいでになると分かっておりますらもう少しなんとか……

ネフ いいんだ……

管理人 小物などはこちらに……（机の上に箱を置く）

ネフ ……（開けて、カチューシャの写真を見つめる）

管理人 台帳はこちらです。地代帳簿もここに。

ネフ ……

管理人 それで、百姓たちが参りましたら、どのように？

ネフ 客間に通してくれ。

管理人 客間！？

ネフ なんだ？

管理人 いえ……

ネフ かまわんよ。

管理人 それからあの、この時期は天候の崩れる前の備えがありました。百姓達もいろいろと、その

……

ネフ すぐに済ませる、大事な話なんだ。

管理人 承知いたしました。

管理人は出ていく。雷鳴。と、小間使い。

ネフ ……カチューシャ？

小間使い （顔を挙げて）あたし？

ネフ いや、すまない。

小間使いは籠を抱え、挨拶をして去っていく。
管理人の妻、来ていて。

管理人の妻 (家具の布など取りつつ) 今日はこちらにお泊りで？

ネフ いや、宿は取ってある。(再び、写真に目を)

管理人妻 お写真ですか。叔母様方がお元気だった頃は、いつも若旦那様を心待ちにして……

ネフ ……

管理人妻 カチューシャも純な娘でしたがね。若旦那様に目をかけられて欲をかいだんですよ。あれ以来人間が変わっちゃった。仕事に身は入らない。辺りかまわず癩癩を起こす。次に奉公した長官の家でも御主人様にくっついてかかったりして、揚句は腕の悪い産婆の家に転がり込んで……、自業自得です。

ネフ 子供は、そこで？

管理人妻 ええまあ。私がソフィア様にいつかつたんですがね。その産婆が産褥熱を感染させちゃった。だもんで乳も飲ませられない。生まれた子は人に頼むしかない。旦那様から頂いたモノもあつという間に。あれは金も大事に出来なかった……

ネフ 子供はどうしたんだ？

管理人妻 そういう仕事の女があるんです。頭数をまとめて養護院に。

ネフ ちゃんとした世話は受けていたのか？

管理人妻 ちゃんとも何も、扱いは同じで。病死の証明書は受け取ったと言っていましたかね。

ネフ ……どんな子だった？

管理人妻 男の子でね、かわいい子でしたよ。

管理人、戻って。

管理人

農夫たちの代表が参りましたが。

ネフ

通してくれ。

管理人の妻は去る。農夫たち、前の空間に。

管理人

泥は落としたんだろうな。床を汚すなよ。

農夫たち、ぞろぞろと。

「どういうことなんだ?」「長げえのか」等々。

ネフリユードフも農夫たちの前に

管理人

静かにしろ。ご主人様が大事な話をなさるんだ。

ネフ

忙しい時期にすまない。座ってくれ。楽にして話をしよう。

農夫たち、顔を見合わせて立っている。

ネフ

どうした? 床なんか汚れたってかまわんよ。

農夫 A

私らは結構です。旦那様、どうぞお座りください。

ネフ

……

管理人

椅子をお持ちしましょう。(行きかける)

ネフ

……いやいい。わかった、なるべく早く済ませよう。今度僕はモスクワを離れるかもしれない。中々顔も出せなくなる。だからって何も変わらない、今迄通りでいいんだが……。実は、前々から考えていたことがあって、それは、土地を金で取引するのは間違っていないかと言うことなんだ。なぜなら、もしそれが進めば、金持ちが買い占めて、その内、ただその場に立つだけで金を請求される、なんてことになりかねない。そうだろうか？

農夫たちザワザワと。

ネフ

そこで僕の考えはこうだ。土地は実際に耕す者たち、つまり皆のものであるべきだ。そこでこの際、土地を分配しようと考えた。

「分配？」「分配たあなんだ」等々。

ネフ

それでも、君たちの意見を聞きたい。皆は、どう思う？

管理人

旦那様はご質問だ。誰か、お応えしろ。

農夫 A

……分配するのは、わしらのものになるということですか？

ネフ

基本的には、そういうことだ。

再び、自分たちで、話す。

管理人

おい。言いてえことのあるもんは手を挙げる！

農夫 D

(手を挙げる)……

ネフ

そのの、君。

農夫 D　もしくれるつうのなら、すっかり頭割りの平等がええです。

ネフ　うん、わかりやすい。僕もまずそう考えた。しかしそれが本当に平等だろうか？　独り者は

いいが子供を何人も抱えている所帯もある。彼らは不公平と思わないだろうか？

農夫 D　……しかし、分けるからにはそりゃ。

ネフ　そうすると中には土地を売ってしまう者もある。買うのは金持ちだ。農民の中にも畑をやめて居酒屋でも、と思うものが出るかもしれない。土地はバラバラになって、結局、金持ちに集まる。

農夫 A　（農夫 D に）だから、そういう話ではねえとってんだ。

ネフ　そこで僕の考えはこうだ。まず君たちが一つの組合を作る。今後土地はその組合が管理する。地代もそこに収める。額はみんなが決める。で、集めた金は共同資金として村のために使うんだ。どうだ？　これなら何もかも自分たちで決められる。

農夫 B が、おずおずと手を上げる。

ネフ　君。

農夫 B　……あの、どうして私らが決めねばならないの？

ネフ　君たちの土地だからじゃないか。

農夫 D　土地は旦那のものだ。旦那が決めるのが筋でしょう。

ネフ　いやだから、それを変えようということだ、つまり……

農夫 A　それで旦那様は、どこから利子をお取りになるんで？

ネフ　そんなものは、取らないんだ！

農夫たちは、明らかに疑惑をもって囁きあう。

管理人

おいお前たち！ 旦那様は地代を自分たちで使えと言って下さって
んでわからない？

いるんだ。な

「筋が通らねえよ」「何を分かれてんだ」「もめごとは沢山」
「俺はどうも引っかかる」等々

ネフ

わかったもういい。君たちの不安は尤もだ。そう思って譲渡契約書を作ってきた、こっちに
写しもある。(みんなに渡して)皆は代表を決めてここに署名してくればいい、それで僕の土
地の管理は……

農夫 A

旦那様。そりゃ無理だ。

ネフ

……無理？ なにが？

農夫 A

私は今迄通りやらせていたんだけど。

農婦 E

ネフリユードフ様には皆感謝しております。不満はありません。どうかこれまでどおりで。

ネフ

……みんな、そういう意見なのか？

農夫 C

(おずおずと、手を挙げる)あの……

ネフ

何だ、何でも言ってくれ。

農婦 F

(たしなめるように)よしなさいよ……

ネフ

いや、構わない。意見を聞きたいんだ。

農夫 C

雨が来る前に、帰りたいんですが……(農夫たち外をうかがう)

ネフ

……そうか、引き留めて悪かった。

農夫たち、そろそろと帰っていく。

管理人、見送って。

管理人 奴らでは埒もあきませんよ。

ネフ (落ちた写しを拾う) 埒があくまで、何度でも話してみる。

管理人 無駄だと思いますが……

管理人は出ていく。

十八 ペテルブルグ駅頭。ネフリユードフの姉ナターシャが呼ぶ。

列車の到着音。蒸気の中、ナターシャ。

ナターシャ ドミトリー、こっち！

ネフ 姉さん。

駆け寄って二人は抱擁する。

ナタ 久しぶり。いつ以来？

ネフ 母さんの葬式以来。姉さん変わりませんね、若返ったみたいだ。

ナタ 貴方は痩せたわね。……それで、いつまでペテルブルグに？

ネフ 元老院しだいです。返事待ちでね。

ナタ ……そう。色んな人に会っていると聞いたけれど。

ネフ まあ。あらかたすみしました。

ナタ 座らない？（二人、ベンチへ）ミーシャ、実は私、何もかも知ってるのよ。
ネフ そうですか、じゃあよかった。
ナタ あなたの考えは立派だわ。でも……
ネフ でも、なんです？
ナタ そんなことができるかと本気で思ってるの？　そういう女性を矯正するなんて。
ネフ ……矯正？
ナタ そう聞いているけれど。
ネフ 違いますよ。矯正するのは僕の方です。
ナタ また、そんなこと……
ネフ 姉さん、彼女は無罪なんです。
ナタ 結婚も、そのため？
ネフ ……まあ、そうです。
ナタ 結婚は、そういう理由でするべきものではないわ。
ネフ では、どういう？
ナタ だって、あなたはそれで幸せなの？　子供は？　その、そういう彼女に産んでもらうの？
ネフ それで一生後悔しないと言い切れる？　人生というものは……
ネフ 人生というものは？
ナタ もっと、他の事を必要とするものだけわ。
ネフ かもしれないね。
ナタ もし良心があれば、彼女だってそんな結婚を望むはずはないと思うけど……
ネフ 彼女は望んでいません。
ナタ そうなの？
ネフ ええ……

ナタ だったら、道は他にもあるわ。

ネフ 道？

ナタ マリエットの事は覚えている？ 運輸大臣の息子と結婚した。今彼女、更生委員として熱心に活動しているの。私も誘われて施設を見学したけれど、本当に誰でも受け入れるの。あなたもペテルブルグにいる間に一度訪ねてみるといいわ。そこなら……

ナターシャの夫、イグナーチイ・ニキイフォロヴィチ。

ニキイフォロヴィチ 我らが救世主に、やっとお目に掛かれました。

ネフ ああ、どうも……

ニキイ 何故、連絡をくれなかったのです、少しはお役に立てたかもしれないのに。

ネフ それは、どうも……

ナタ 例の更生施設の話をしてあげられる？

ニキイ ああ、あれはいい。しかしその前に、近くにいいバーができてね。ともかく再会の祝杯をあげたいのですが。不謹慎ですか？

ネフ いえ……

ニキイ よかった。ではまいります。どうぞ……

ナタ あなた、できたらドミトリーも今夜のオペラに……

ニキイ 椿姫はまずいだらう……

二人、出ていく。

十九 ペテルブルグ元老院請願局、廊下。

ファナーリン来る。

ファナ (ネフリユードフに) 元老院には？

ネフ ……行ったよ。が、話にならない。

ファナ それが元老院です。

ネフ セレーニンまで棄却に回るとは思わなかった。あれは学友なんだ。

ファナ その、ご学友です。

元老院検事局次長セレーニン。

セレーニン やあ、君が来ているなんて知らなかったよ。

ネフ 僕も、君が検事局長とは知らなかった。

セレ まだ次長だよ。しかしなんだってこんなところまで？

ネフ ここへ来たのは、ここでは正義がモノを言って無実の女を救えると期待したからさ。

セレ 無実の女？

ネフ たった今、却下された事件だよ。

セレ ああマースロワの事件か。しかしあの上訴は根拠が薄いよ。

ネフ 薄い、根拠が？ 一人の女が無実の罪を被ろうというのに？

セレ まあ、そういうこともあるかもしれないが……

ネフ かもしれないではなく、現にあるんだ。

セレ どうしてそんなことがわかる？

ネフ 僕が陪審員だったからさ。その裁判でとんでもない間違いがあったんだ。

セレ なるほど。だったらその時直ぐ申し出ればよかったんだ。

ネフ もちろん申し出たさ。

セレ 裁判記録にとどめるよう申請すべきだった。それがあればまた結果も変わっていたかもしれない。

ネフ 何がどうだろうと、判決が間違っていたのは明らかじゃないか。

セレ 元老院には原判決そのものの正否を判断する権限はないんだ、知っているだろう。そんなものがあつたら正義そのものを破壊しかねない。それはともかく久しぶりだ、（握手の手を取って）ぜひもう一度会わなくちゃ。六時には家にいるよ。ナジーエージンスカヤだ。連絡してくれ。必ずだよ。

セレーニンは去っていく。

ファナ 二人して乗り込んできた、というのが、心証を悪くしたのかもしれないね。ともかく恩赦

に切り替えましょう。すぐに書類を作成したほうがいい。

ネフ 望みは？

ファナ やってみる価値はあります。

ネフ ……（ベンチに腰を）しかし、時々、こっち方が罪深いのではないかと思わされるよ。
なぜ？

我々のしていることは、不当な扱いから人々を救うために、不当な扱いを自覚もなく繰り返す奴らに頭を下げて回る、ということだからね。

ファナ おっしゃる通りです。しかしそれが嫌なら、爆弾を投げる連中と行動を共にするしかない。
……どうします？

ネフ 頭は下げる。ただ、シベリア行きになるなら、寒くなる前がいい。

ファナ 時期はすぐ決まるでしょう。準備はしておいた方がいい。
ネフ 病院でカチューシャは？
ファナ ご自分で確かめに。サインも又必要ですから。(封筒を渡す)

ファナーリンは、去っていく。

二十 医療病院

守衛が帳簿を繰りながら出てくる。

守衛 マースロワ、マースロワ……、ああマースロワね、小児病棟の。女囚監房に送り返されまし
た。

ネフ なぜ？

守衛 (鼻で笑って) 噂ではね、色々……

ネフ うわさ？

守衛 まあ……

ネフ (胸ぐらをつかんで) どういうことだ!?

守衛 いや、私はなにも。

ネフ すまない。(紙幣を渡す) 分かっていることを教えてくれ。

守衛 薬局で助手といちゃついている所を院長に見つかったんですよ。

ネフ ……助手？

守衛 子供だけ相手にしてりゃよかったのに。ま、院長も院長だから。で、その日のうちに……
ネフ ……

女看守。

女看守 面会は所定の曜日以外は、許可されません。

ネフ ……以前はそんなことはなかったじゃないか？

女看守 前の所長は解任されました。新所長の方針です。

ネフ 皇帝宛の請願書にサインが必要なんだ。

女看守 お預かりいたします。

ネフ いや、直接伝えたい。所長は？

女看守 今週は不在です。

ネフ それじゃ困るんだ、君だって僕のこと知っているじゃないか。

女看守 ……十分でよろしければ。

ネフ それでいい。(紙幣を渡して)ありがとう。

女看守 (受け取って)そちらでお待ちください。(出ていく)

手錠をかけられたカチューシャと女看守。

カチュー (ネフリユードフに)こんばんは。

女看守は隅の椅子に、面会記録に記入。

ネフ 遅い時間にすまない。午前中はペテルブルグだったから。

カチユ そう……

ネフ いくつか報告がある、元老院は申請を却下した。

カチユ そう思っていました。

ネフ それで皇帝への直訴に切り替えた。書類にサインが欲しい。明日朝、寄って受け取っていく。

(写真をカチューシャに見せようと)

カチユ 病院へは？

ネフ (手が止まる) 病院？

カチユ 寄ってきたんでしよう、なぜ戻されたのか聞かないの？

ネフ (目を伏せて) ……ぼくには関係のないことだ。

カチユ 関係ない？

ネフ 僕は、君の生き方について何か言える立場じゃない。けれど何があろうと決心を変えるつもりはない。

カチユ ……

ネフ それから、準備をしておかなくちゃならない。必要なものは？

カチユ ……何も。

ネフ シベリアへは僕も同行する。君の物はアグラフェーナに揃えさせる。まず書類を確認してく

れないか？

カチユ もう、よせばいいのに。

ネフ ……

カチユ あなたは目をふさいでいるだけ。

ネフ 僕が、何に？

カチユ 私が根っから腐っている、ということに。

ネフ 君はまだ自分の事をそんな風に思っているのか？

カチュ 思ってる？ 事実よ。だから我慢できなかったの、病院でも。

ネフ ……カチューシャ。

カチュ 薬局の助手をどう誘惑したか聞きたい？ 若くていい男でね、あたしも久しぶりだったから

…

ネフ よしてくれ！

カチュ ……

ネフ カチューシャ、僕はどこまでも君と一緒に行く。君が何をしようと、それは僕の罪だ。君に
対する愛情は揺らがない。それだけは信じてくれ。

カチュ 愛情？

ネフ そうだ。他に何があるんだ？

カチュ ……嬉しくて、涙が出ます。

ネフ 書類を見せてくれ。

書類の上に、写真がある。

ネフ パノーヴァの叔母の家にあった。君が写っている…

カチュ ……

ネフ 君は、過去は変えられないと言った。でも無かったことにはできない。僕は君を忘れるつもりはない。

カチュ ……

ネフ いらぬなら返してくれ。僕が持っている。

カチュ ……サインはしておきます。いろいろありがとう。

カチューシャは書類を取り、戻る
看守、写真をネフリユードフに。

女看守 マースロワは病院では何もしていませんよ。

ネフ ……

女看守 言い寄ったのは病院長です。拒まれた腹いせに助手になすり付けたのでしよう。以前にも同

じことがありました。

ネフ …… だったら、なぜ？

女看守 公爵が、お信じの様でしたから。

ネフリ ……

女看守 (紙幣を返し)これは受け取れません。

ネフ …… 俺は、また。

女看守 マースロワは酒も煙草もやめたようです。少なくとも病院に勤めてからは。今後は面会も規則通りにお願ひします。

女看守、去っていく。

以下の間に、ネフリユードフも。

二十二 芸術座「緑の朝」明治座舞台稽古(大正七年一月)

川島が終演後の舞台に来て、所在なげに。
付き人を連れた須磨子。(囚人の衣装にガウン)

須磨子

あら、まだいたの？

川島

そりゃないな。会いたいと言ったのは須磨子さんでしょう。

須磨子

待たせたからもうお帰りんになったかと思って。(付き人に)今日はもういいわ、明日朝、早く来て。

付き人

お茶をお持ちしますか？

川島

僕なら結構。

付き人

失礼します(去る)

川島

こんな時間まで稽古ですか？

須磨子

幾らしても足りないの。そうね、今日は先生も来なかったから、ただ待たせてしまったのね。

川島

伏せているとか。悪い風邪が流行ってるから気をつけないと。

須磨子

それでも来るって言い張るのを無理やり引き止めたのよ。

川島

そういや、その節は大変失礼を。毎日のように怒らせました。

須磨子

そのつもりだったくせに。身体の弱い先生をイジメて、何かあったらただおこななかった。

川島

心外だなあ、僕はずっと味方ですよ。先生をイジメていたのは世間の妬みと嫉妬です。

須磨子

小山内さんみたいに？

川島

今度はその小山内薫を大抜擢だ。松竹の目論見でしょうが、懐の大きさは今や島村抱月の独壇場ですよ。

須磨子

そう思う？

川島

新劇を捨てたと言われた浅草公演も新派との共演も果たした。今度は須磨子猿之助共演。先生は大プロデューサーです。

須磨子

あなた、昔私のことをなんとか試験紙とか言ったそうじゃない。

川島

言ったかな？

須磨子

どう言う意味だったの？

川島

回りが反応せざるを得ない、くらいの意味でしょうね。踏み絵なんだな。しかも、踏まずに
いられない気にさせる。

須磨子

……

川島

……そんなことを聞くために待たせたんですか？

須磨子

いいえ。芝居の感想をうかがいたくて。

川島

あなたのですか？

須磨子

ええ。

川島

……その前に、僕も一つ伺っていいですか？

須磨子

なに？

川島

どうしてお須磨さんは、先生との結婚にこだわるんです？

須磨子

……（応えずに、茶碗の蓋を取る）

川島

本当に聞きたかったのはそっちですよね。僕が奥様を取材しているから。もういいんじゃないかな？ 奥様は絶対に離婚を受け入れません。お優しい先生も一方的なことはしない。須磨子さんもそれは百も承知でしょう。

須磨子

……

川島

先生をイジメてるのは、お須磨さんだと思ふな。

須磨子

私は二度、夫と別れているの。

川島

それで？ 余計、思い入れすることはないでしょう。第一この世界じゃ、貞奴だって帝劇の

須磨子

森律子だって……

約束は約束。それくらいはしてもらってもいいと思うけど。

と、着替えを持った付き人が戻る。

付き人 先生……

須磨子 車ね、ありがとう。あなたは？

川島 ご心配なく。

付き人 いえあの、芸術座の方がいらして。午後から先生の容体が……

須磨子 どういうこと？ ちょっとでも変わったら知らせてくれと言ってあったのに！

付き人 (泣き声で) わかりません、わたし……

川島 すぐ行った方がいい。僕も車ひろって……

付き人 (出て行くこうとする須磨子に) 先生、お着替えを。

須磨子 (振り返って、付き人に) ばか！

汽笛。貨車の連結の音。蒸気音。

音楽。(須磨子は去り、付き人と川島も追う)

二十三 停車場

銃を持った護送警官①、②、③(③は女子)

女囚A、C、E、F縛られてつながっている。

奥の台上から、中央通路に向かって一列に。

護送警官① 並べ！ 点呼だ！ ぐずぐずするな！

護送警官② 女はそっちだ。

護送警官③ さっさと歩く！ よそ見しない！

警官① (奥へ) 国事犯は待機。男は後ろの車両！

女囚 A 何人倒れたの？
女囚 C 分かりやしないよ。
女囚 E あたしらの列からは三人。男たちからは四、五人。
警官③ 口はきかない！

護送警官③は、名札と記録を照合。

護送警官②は、次の列の引致に退場。

ネフリユードフ。上手前より。

ネフ カチューシャ！？ カチューシャ！？

女囚 B (ターニャ) D、奥中央から。

女囚 B (振り返って) ほら、あんたのことだろ？

ネフ どこだ？ カチューシャ

女囚 B あそこ。(とネフリユードフを示す) ここよ。こっち！
(現れて) どこ？

ネフ カチューシャ！ すまない！

女囚 B あんたに何か言ってるよ！

カチュ ヌ ええ？

ネフ 病院のことだ！ 君に何と言って謝ったらいいか！

女囚達、笑い声など。

カチュ
（フードを外して）聞こえない！ なんのこと？

ネフ
荷物は？

カチュ
にもつ？

ネフ
君宛に送った。

カチュ
とどいたわ、ありがとう。

ネフ
何か欲しいものは？

女囚 A
喉が渴いた！ 水をおくれ！

女囚 C
雨を降らしてちょうだい！（女囚達、笑う）

ネフ
水もないのか？

カチュ
足りないのよ！

ネフ
わかった、すぐ渡す！

護送隊長
（ネフリュードフの前に廻り）公爵、困ります。

ネフ
彼女たちに水を。

隊長
決められた分は配ってあります。

ネフ
足りないんだ。今手配する。（奥へ）おい、誰か！

隊長
急いでください。

ネフ
カチューシャ、僕は次の列車で追いかけて捕まえる。七日後だ！ それまで頑張ってくれ！

カチュ
大丈夫よ。大丈夫！

ネフ
（振り向いて）水だ、あるだけ買ってくれ。（出ていく）

女囚 B
（カチューシャに）まともな人だよ、あの人は。

カチュ
……

隊長
出発だ。乗車！ もたもたするな！

と、子供の叫び声「パパ！　パパ！」

警官①
(中で声)ふざけるな！(銃尻で殴った音)

殴られた囚人①、下手より転がり出る。子供の悲鳴。

警官①
(現れて)列から外れるなど、言っただろう！

警官③
(中へ入って子供を押しとどめる様子)ダメ、戻りなさい！

囚人①
母親が、昨日死んだんです！

警官①
それがどうした！？

囚人①
シベリアまで一緒に行くことになっていて、子供を一人にしては置けません。

警官①
規則をなんだと思っっているんだ！

女囚 A
どこに戻れっていうんだよ！？

女囚 E
誰が面倒見るんだ！　死んじゃまうだろう！

警官②
(押しとどめて)おい！

カチュ
あの子なら知ってる！

警官①
(カチューシャに)おい、いい加減にしろ！

カチュ
私の勤めていた病院にいました！　私が連れて行きます。

警官①
(押しとどめて)列に戻れ！

警官②
貴様らいい加減にしろ！(と、カチューシャを押し倒し、銃を)

ネフ
(現れて)止してくれ！　何をしている？

隊長
公爵！(押しとどめる)

政治犯のシモンソン、間に入る。後ろからヴェーラ。

シモンソン 囚人の虐待は規律違反じゃないのか！

警官① なんだと？

シモンソン 殴ることは許されない！ 違法行為だ！

警官① この……

ヴェーラ 子供は、国事犯の車両で面倒を見ます。

警官② (カチューシャに)列に戻れ！

シモンソン 看護婦もいたほうがいい。

ネフ (隊長に)僕からも頼む。手続きはする。

警官① おいシモンソン！ この上盾つくと、貴様……

隊長 よせ。(行かせると合図)

ヴェーラ マースロワ、私達と一緒に。

カチュ

ヴェーラ (ネフリュードフに)また、お会いしましたね。

ネフ 君は……

ヴェーラ (子供に言いつつ去る)さあ、行きましょう。

隊長 (ネフリュードフに)目をつぶるのは、トムスクまでです。

ナターシャが、上手より。

ナタ ドミトリイ！

警官②

出発だ！ 乗車！

女囚達は奥へ。シモンソンたちも続く。

ナタ 何度も手紙を書いたのよ。どうしても思いとどまれないの？

ネフ 決めたことなんです。

ナタ 恩赦の結果ならこっちで待つことだってできるじゃない。

ネフ そんなことはもうどうでもいいんだ。

ナタ どういうこと？

ネフ ようやくわかったんです。僕は彼女と一緒に生きていく。同じ場所で、同じ空気を吸って。

それが人生でただ一つ意味のあることなんだ。

ナタ ……

ネフ クラジミンスコエの土地は手を付けていない。僕が死んだら姉さんの子供たちのものです。

ナタ そんなこと…

ネフ 義兄さんによろしく。これでお別れです。

烈しい汽笛。ネフリユードフは、舞台先端に。

汽車が蒸気を吐いて、出発していく。

音楽一度盛り上がり、次の場のオルゴールに。

二十四 列車内、政治犯の車両。

汽車の走行音は続く。

貨物列車のベンチ。カチューシャは子供を寝かせている。

金網を隔ててシモンソン。ヴェーラが来る。

カチュ
（立ち上がって）よく寝ている……

ヴェーラ
子供の扱いが上手いのね。

カチュ
……まさか。（オルゴールを止める）

ヴェーラ
汽車はトムスクまでの三千キロ、残りは歩き。だけど野営地では必ず問題が起きる。あなたはこの先も私たちといられるようにした方がいいわ。

カチュ
問題？

ヴェーラ
一部の刑事犯がね。博打に喧嘩に、女囚を襲ったり。兵隊は見ているだけ。

カチュ
一度にこんな人数が送られるなんて知らなかった。

ヴェーラ
裁判すら受けていない人たちも大勢。

カチュ
あなたもその一人でしょう。

ヴェーラ
私は初めからそのつもりだったもの。

カチュ
銃を撃ったことなんてあったの？

ヴェーラ
いいえ。でも撃たれたのは警官、犯人は私たちのグループから出る。重要な仲間を残したかったの。

カチュ
（シモンソンに）あなたもその集会に？

シモン
……（首を振る）

ヴェーラ
シモンソンは読み書きの先生。軍人の父親に反発して、村でお百姓や子供に教え回っていたの。それで逮捕。

カチュ
それだけで？

ヴェーラ
（シモンソンに）禁止命令を無視し続けたからよね。

シモン
……（苦笑する）

カチユ 戻ったらまた先生に？

ヴェーラ いえ、今度は終身刑。

カチユ なぜ！？

ヴェーラ 革命といっても爆弾を投げるばかりじゃないもの。今、この国が抱えている腐敗を訴えたり、そのための読み書きを教えたり……。彼はずっと素朴。人が何のために生きるのか、伝えたかっただけ。

カチユ ……何のために生きるの？

ヴェーラ (笑う)ええ？

カチユ きかせて……

ヴェーラ あなたがその子にしてること。人は他の人の幸福の為に生きるの。

カチユ ……

ヴェーラ 今度はあなたの事を聞かせて。あなたは公爵と一緒になるつもり？

カチユ まさか。

ヴェーラ 彼は本気でしよう？

カチユ あの人は差し出しているだけ、何もかも。そうしないと罪を償えないと信じているから。

ヴェーラ 中々できることじゃないわ。

カチユ ええそう。だけど私にそんな価値があると思う？ あの人が何かを捨てるたびに私は過去を

突き付けられるのよ。

ヴェーラ それだって望んだ過去じゃないでしょう？

カチユ どうだか……

ヴェーラ ……抜けだそうとは？

カチユ 何度も。ここは私のいるところじゃない。じゃあどこ。だから吞んで忘れて、忘れるために

また吞んで……、その繰り返し。

ヴェーラ ……

カチュ 元々、そういう女だったのよ。

ヴェーラ もし公爵がそういうあなたと、一緒になりたいと望んだら？

カチュ ……

ヴェーラ そうしたら、受け入れる？

カチュ 馬鹿馬鹿しい。それよりあなたは？ 刑期を終えたらまた戻るの？

ヴェーラ ……さあ。

カチュ あなたたちは本当に信じてるの、いつか理想の世界が手に入ると。

ヴェーラ (微笑んで)無理にでもね。

汽笛。囚人たちによる、転換。

二十五 野営地① 国事犯房

囚人たちテーブルなど出して、動き回る。

囚人③ (仕事をしつつ)大衆とは権力を崇拜するものだ。もし我々が権力を手にしたら、今度は我々

を崇拜するようになる。

女囚E あの人たちにも理想はあるわ。どうして認めないの？

囚人② ないものは認めようがないだろう。

女囚E なぜ、ないと言い切れるの？

囚人④ いやそれも違う。過度の期待は禁物ということだ。大衆は活動の対象で協力者ではない。正しい道を我々が示さない限り、自覚は生まれえない。

女囚C (④に)それこそ専制じゃないの。

囚人④ ところが専制なんだ？

女囚C 正しい道ってなに？ フランス革命じゃジャコバン派もダントン派

も我こそ正し

いと言いい張ってた。

女囚G 拳句が帝政に逆戻り。

囚人③ (女囚Cに)その過ちを経て今の革命理論があるんじゃないか。そんな反論こそ無知蒙昧な観念論だ。

ここまででネフリユードフがきて、ヴェーラの隣に。

ネフ 今日は一段とにぎやかだね。

囚人② これは公爵。(貴族風に礼をする)

ヴェーラ もう議論は聞き飽きたでしょう。今日で合流して三日？

ネフ いや四日目だ。君たちの話は勉強になるよ。

囚人③ (皮肉に)光栄の極みですね。

ヴェーラ (囚人たちに)議論はご自分たちのお部屋でどうぞ。(囚人②く④去る)……それで、カチューシャの件は？

ネフ 許可がとれた。次の野営地までは君たちと一緒にだ。

ヴェーラ カチューシャ。

カチューシャは病人(囚人⑤)に薬を飲ませている。

ヴェーラ 公爵が話をつけてくれたわ。次まで一緒よ。

カチュー (ネフリユードフに)ありがとう。

ネフ いや……

シモンソン、ネフリュードフに近づいて。

シモン 公爵……

ネフ やあ、シモンソン。

シモン 実は、話を聞いていただきたいのですが。

ネフ 話？

シモン できれば二人で。

ネフ ……そうか。僕に出来ることだといいが、二人になれるかな？

ヴェーラ 私は構わないでしょう？ 何とかします。

点呼の笛が鳴る。

女囚 A さあ、点呼、点呼。

全員立ち上がって、出ていく。

カチューシャは咳込む囚人⑤に付き添う。

ネフ (カチューシャに) ああ、君は、今日はいいんだ。話をしよう。

カチュ ……

ヴェーラ 「行きましょう」と病人を引受け出ていく。

ネフ

すまない。しかし、中々二人になれなくて。……座らないか？（カチ ユーシヤ、座る）実は、今後の事なんだが、もちろんまだ恩赦の可能性は残っている、だが時期は不明だ。万が一このまま刑期を全うしたとして、あと六年。思うほど長くない。それで実は、シベリアの南に母が建てた別荘があるんだ。手を入れれば住めないことはない。春には一面に菜の花が咲く、その真ん中にある小さな家だ。君が構わなければ準備をしておきたい、どうだろうか？

カチユ

……あなたが、そうした方がいいと思うのなら。

ネフ

僕は、よくわかりません。

カチユ

……そうか。とりあえず準備はしておこう。

ネフ

……（目を伏せる）

カチユ

（その様子に）具合でもよくないの？

ネフ

いえ。

カチユ

今更と思われるだろうが、これはみんな僕がしたくてしていることなんだ、君は何も負担に思う必要はない。

ネフ

……ええ。

カチユ

判決の後とはかく必死だった。けれどその内に気付いた、救われているのは僕の方だということに。

ネフ

なぜあなたが救われなければならないんです？

カチユ

罪を犯したからさ。

ネフ

罪のない人間はいないわ。

カチユ

ああそうだ。だからいつまでも人は傷つけあう。君が僕に、そんなことは二度としたくないと思わせてくれた。

カチュ ……あなたは、それで幸せ？

ネフ 当たり前じゃないか。どうしてそんなことを聞く？

カチュ いえ……。ごめんなさい。

ネフ ……本当に、体調が悪いなら？

カチュ いえ、大丈夫。ドミトリイ、あの写真はまだ持っている？

ネフ 写真？

カチュ あの、パノーヴァの。

ネフ 宿にある。取ってくるよ。

カチュ いいの。ごめんなさい、病人が心配だから。(出ていく)

ネフ ……

二十六 野营地② 独房。

翌日、夜。ネフリユードフそのまま待つ。

ヴェーラ来る。

ヴェーラ お待たせして……

ネフ いや……。……シモンソンは？

ヴェーラ 今、参ります。

シモンソン。

シモン すみません、出発が明日早朝になりました。しばらく別行動です。
ネフ らしいね。で？

シモン ええ、時間がないので単刀直入に申し上げます。僕はカチューシャを愛しています。彼女と

結婚したい。お許し戴けますか？

ネフ ……いや、ちょっと待ってください。…話というのはそのことだったのか？

シモン ええ。

ネフ しかし…、それはカチューシャも同意したんだろうね？

シモン お許しを戴いたら、改めて僕から申し込みます。

ネフ 許し？ どうして？僕は彼女の父親でも保護者でもない。

シモン カチューシャは求めると思います。

ネフ ばかな！彼女は自由だ。

シモン しかし、あなたは彼女のために大きな犠牲を払っていらっしやる。

ネフ 犠牲？

シモン ええ…

ネフ (笑おうとして)とんでもない、僕は当然のことをしているだけだ。そんな気はこれっぽっちもない！

シモン ……

ネフ しかし、どうしてこんな話になるのか…、僕にはどうも…

ヴェーラ 償いはもう充分ではないでしょうか？

ネフ (顔を挙げ、ヴェーラを見る)…

ヴェーラ 彼女も御好意を受け続けたいとは思っていません。解放してやることも必要と思いますが。

ネフ 解放？僕が束縛している？

シモン そう見えます。

ネフ 待ってくれ、(シモンソンに)カチューシャはどう言ってるんだ？カチューシャに会いたい。会って話をさせてくれ。

シモン
呼んで来ます。

シモンソン、出ていく。

ネフ
（頭を抱えて）どういふつもりなんだ、カチューシャは？
ヴェーラ
シモンソンの気持ちには気づいてたでしようね。
ネフ
それで？ 奴を愛するようになったのか、この半月で！ いや。
ヴェーラ
……愛にも、色々な形があります。
ネフ
（また、頭を抱えて）僕は、どうしたらいい？
ヴェーラ
思っていることを、素直にお話しになったら？

カチューシャ。

カチュー
こんばんは。
ネフ
今、シモンソンと話をした。彼は君と結婚したいそうさ。君はどう思っている？ 君の気持ち
カチュー
ちを聞きたい。
……私の気持ち？
ネフ
決めるのは君だ、僕は……
カチュー
私は、どなたとも一緒にはなりません。
ネフ
……何故？
カチュー
その資格がないからです。
ネフ
どうしてそんな風に思う？ 君は誰とだって結婚できる。過去に縛られる必要はない。
カチュー
……

ネフ もう一度聞く。君は、君が思うとおりによければいい、どうしたい？
カチユ あなたは、どうすればいいとお考えですか？
ネフ ……彼を愛しているのか？
カチユ あの人は純粋な人です。
ネフ それで？

シモンソンが入ってくる。

ネフ かまわない。君の本当の気持ちを聞かせてくれ。

カチユ ……彼を、愛しています。

ネフ ……それは、結婚、するつもりだということか？

カチユ はい。

ネフ ……

カチユ 次の宿営地には、教会があるそうです。

ネフ しかしそのあとは？ 二人で暮らすのか。シベリアで、ずっと？

シモン 行けば、私のような罪人にもするべきことは沢山あります。カチユーシャもその一人になつて欲しい。

ネフ ……カチユーシャ。

カチユ 許してください。

ネフ 許し！？ なぜ？ そんなものは必要ないんだ！ 君が僕に何の許しを？ 許されなければならぬのは僕の方なんだ。

カチユ あなたは私には過ぎた方でした。私のことはお忘れになって下さい。

ネフ ……

シモン 出発は夜明けの予定です。

ヴェーラ 休んだ方がいいわ。

シモン カチューシャを送っていきます。

二人、帰ろうと……

ネフ もう、会えないのか？

シモン 出発の点呼前に。

二人、出ていく。

ネフリユードフは、立ったまま。

ヴェーラ カチューシャは、あなただけを愛するべきだった？

ネフ ……

ヴェーラ 他の男が目に入るとは思ってもいなかったのでしょうか？

ネフ そんなこと……

ヴェーラ 入っていないわまだ。彼女は、誰よりもあなたを愛してる。

ネフ ……

ヴェーラ 明日は復活祭ね。

舞台、上手台上の部屋に、護送警官③、

警官③ 公爵に電報です。(テーブルにおいて、去る)

ヴェーラ おやすみなさい。(去る)

ネフリュードフは、上手の部屋に。手袋を取り電報を開く。

ネフ ……(顔を挙げる)

二十七 シベリア、荒野。

ホイッスルが鳴り響く。

舞台奥に倒木が一本。

護送警官② (現れて)列を整えろ。荷物は各自。

囚人たちの列。

ネフ ……カチューシャ。カチューシャ!

警官③ 公爵、まもなく出発です。

ネフ 分かってる。カチューシャ! どこだ?

カチュ (列の中から)こっちよ! ここ!

ネフ カチューシャ、(掲げて)恩赦だ! 認められたんだ!

カチュ ……

ネフ 一週間で正式に命令が下りる。その場で君は釈放だ!

警官② 公爵、この場での囚人との接触は禁止されています。

ネフ　しかし恩赦が出たんだ。

警官③　こちらには何の指示もありません。規則を守ってください！

ネフ　彼女は、もう囚人じゃない！

警官②　公爵。特別扱いもここまでです！

カチュ　ドミトリイ！　私のことは心配しないで。なににもかもあなたのおかげだわ！　ありがとう！

（警官②に）これで最後かもしれないんだ、ほんの少し時間をくれ。

警官②　出発までです。（女囚に）座るな。間もなく出かける。（列の先頭へ）

ネフ　カチューシャ！　君はそれでもシモンソンと？

カチュ　ええ。

ネフ　カチューシャ、僕は……

カチュ　もう何も言わないで。

ネフ　これで、本当に、終わりなのか？

懐中時計を見ていた護送警官②、顔を挙げる。

警官②　時間だ！　準備！

護送警官たちの吹くホイッスル（ひゅのか所）。

囚人たちは、おろしていた荷物を持つ。

カチュ　ええそうです！　私と、あなたは……

警官②、③　（交互に）出発！　出発！

隊列は奥へ。

ネフリ カチューシャ……

カチュ あなたはモスクワへ帰って。さようならミーチャ。

ネフ カチューシャ、愛してる。

警官② 列について。遅れるな。

ネフ 愛している、カチューシャ！

カチューシャは、囚人たちと奥へ。

倒木の前で列は一度とまる。

ネフ (思い出して写真を出し)……カチューシャ!(掲げる)

カチューシャのみ、走り戻って。

ネフリユードフの前に。カチューシャから口づける。

鐘が鳴る。列の先頭の男たちの手で、倒木が立つ。

カチュ キリストはよみがえりたまえり。

シモンソンが待っている。列は進む。

二十八 エピローグ 芸術倶楽部劇場

隊列を見送るように、喪服のイチ子舞台前下手に。
黒腕章の川島が来る。

川島 奥さん。

イチ子 ……(振り返る)

川島 まさか、通夜にいらしているとは思いませんでした。

イチ子 ……

川島 そういや、最後の「カルメン」もお須磨さんの招待で、ご覧になったんですよ。
イチ子 ええ。

川島 覚悟の後追いだ。お別れは舞台からしたかったのじゃないね。

イチ子 わたしは、見ていないのだけれど……

川島 はい。

イチ子 あの二人が一緒になった時の演目も、あの舞台のように、最後は殺されるの？

川島 「復活」ですか？ いやそんなことはない。ただ……

イチ子 ただ、何？

川島 過剰なくらい挑む話ですよ。世間の概念や個人の生き方に。

イチ子 それで？

川島 それで？ それで、勿論負けるんです。あの二人のように……

イチ子 そう……

幕。